

ア！安全・快適街づくりニュース

2016年6月 vol.22 2016年度総集編

人を育み川 中川

朝日映る
空の山
夕日染る
スカイツリー
老舗の街
9はむ街
森羅の家
万葉の昔
人を育み川
中川
お重 石川金辰





惜別



目次	
惜別の記	
鈴木一喜 町会長のこと.....	2
徳倉眞治 会長のこと	4
石川金治 理事長のこと.....	6
はじめに	
「安心・快適街づくり」に向けた活動の継続 : 成戸寿彦.....	8
27 年度の活動結果と 28 年度への展望 : 宇賀俊夫.....	10
浸水都市から親水都市へ : 加藤孝明	12
地域から	
ア! 安全・快適街づくりと共に 10 年 : 青柳勇	14
モンチチ公園の経緯と今後 : 町山光司.....	15
民生委員として何ができるか : 津村寿子.....	17
安政大地震を伝える石地蔵&浸水しなかったお地蔵様 : 中川榮久	18
自動車事故を起こさないコツ: 高田信一	19
自然の猛威に立ち向かう勇気とチームワークを目指して: 岡田雅樹.....	20
地域の方々から学ぶ : 渋谷栄一	21
子育てひろば事業・子育て講座 : 齊藤真弓.....	22
「まちづくり支援事業勉強会」に参加して : 金井清一.....	23
西新小岩三丁目有志勉強会報告 : 西新小岩三丁目有志.....	25
水害時避難場所高台等整備勉強会の提言 : 西新小岩三丁目有志	29
理事らから	
輪中会議に係る人材・組織の豊かさと可能性について : 土肥英生	31
オランダの水災害対策の新方針:デルタプログラム : 中村仁	32
ロンドン、ダブリン水辺紀行 : 山上忠	33
学生（元学生）から	
第9回輪中会議 “地域の財産のこれからの発展” : 色田彩恵	35
中川七曲りの親水を考よう! : 塩崎由人.....	36
水辺から生まれる都市の魅力 : 金裁澁	37
世代を超えた“学びの場”としての地域の活用に向けて : 南貴久	42
行政から	
水防災意識社会を再構築する取り組みと 荒川水系河川整備計画の策定について : 中須賀淳.....	44
荒川における水辺利用とミズベリング (MIZBERING) について : 内田剛二	45
区の水害への取り組みについて : 情野正彦、関口薫ら.....	46
NPO ア! から	
平成 27 年度前期葛飾区地域活動団体助成事業 (報告) : 増澤一郎.....	47
NPO ア! のホームページについて : 古川修	49
「天サイ! まなぶくん」の連続受賞と新機能について : 古川修	50
葛飾区新小岩北地区における 2006ー2016 活動概観 : 渡邊・塩崎.....	52

鈴木一喜 町会長のこと = 輪（和）をもって勤める =

町会は地域密着型ミニ行政といってもいいほど、行政と関わるたくさんの仕事と地元ならではの気配りがある。鈴木町会長は“輪をもって勤める”と終活の思いでいた。さまざまな集まりで、大勢の前での素晴らしいスピーチなども、日ごろの活動の柔軟性が現れている。地元主体で考えるそのバランス感覚に、いつも敬服した。惜別は悔しい。でも！バトンタッチする人たちがいます。千の風につけて見守ってください。

以下は、21号で渡邊が鈴木会長をインタビューしたときの記録から“鈴木会長いわく”として不足だろうがまとめてみた。また、3丁目町会の淵井さんに電話でコメントいただいた一言が鈴木会長らしさをあらわしているので載せさせていただいた。

淵井さんコメント

淵井さんはいわく、鈴木一喜さんとは、PTA、町会で一緒に活動したいわば同期の桜（鈴木、淵井、赤澤）。“一喜さん”は、余計なことは言わず、人にいやみや注意をすることなく、人にいやな感じを与えない人だった。いっぱい飲むと豪快に笑い、その天真爛漫さが鈴木さんだった。一方、どんぶり勘定時代の町会の会計の近代化を推進して、自立運営を継続できるようにしたことも大事な業績だ。

同時代を一喜さんとともに活動した淵井さんには、「町会のしたざさえをしっかりと頼む！」といわば遺言のように話して、逝ってしまった。

加藤先生コメント

鈴木さんは「先生なんて呼ぶなよ」と言っているにちがいないと思いますが、ここでは、あえて鈴木先生と書きたいと思います。誰でも分かるように誰でも分かる日本語で話すことを徹底的に身に着けるべし、ということを教えられました。社会では当たり前過ぎることですが、実は学者・研究者の世界では必ずしもそうではなく、最近も議論されている重要な論点です。それをいち早く学ぶ機会をいただきました。人をみる力、地域をみる力、その深さと広がり、いずれも懐の深い人間力に裏付けられた鈴木先生。言葉で書くとどうしても陳腐な感じになってしまいます。決して表にださない私の語彙では表しきれないある種の「格好良さ」に憧れを感じていました。

*** 鈴木会長いわく ***

輪を持って行うべし

かつて40代のころPTA会長は6年務めた。町会長になって14年だったろう。区から持ち込まれる問題は多様。ついては住民が意見を交わさなければならないところは町会で議論してもらおう。まさに町会活動は行政の手足のよう。20年前は、議員を伴って要請活動を行ったりしたが、近年は行政サービスも近代化し向上してきた。

商人出身の鈴木会長は余剰金を生む努力をした。町会活動は住民に合わせて行うのが心情。昔、ワンマン会長だった父からの教訓が生きている。熱心だったがワンマンで皆

が離れていった。この体験から“輪を持って行こうべし”と考えるようになったという。

バランスだよね： “ふわふわ”？した運営方法のように見えるが・・・と問うと・・・

バランスだよね。長として個性は出さなくて、でもやっぱり組織であるから、各部、役員さんたちとのコミュニケーションは大事。何かあった時には、会長責任はいつも取ろうと思っている。町会トップとして、いつでも責任はとれるよ。前会長が、商人出身だから、町会財政はまあ私もそれを継承してやっている。余剰金の活用は広い。盆踊りや、お祭りにしろ。大口寄付が無くなっちゃったから。昔とはちがうがね。

NPOとの出会い・NPOとのかかわりや防災活動

徳倉さん、石川さんとであって、NPOのそうそうたるメンバーをみて、町会は何をするのか考えた。最初は、川や土手の温度測定など協力したのがきっかけだろう。

当時、私、釣りが好きでね、マイボートをもっていた。NPO活動で、川の温度、土手の温度測定に協力した。それと前任の町会長は大正12年生まれで関東大震災体験者。防災活動は前任会長が非常に一生懸命進んでやった。うちの町会には、一時避難所3か所に各地域の方が集まって、一番安全なのは、土手だろうと言うことで、土手を渡って、蔵前通りの手前で降りて、新小岩公園に。新小岩中学あたりに、備蓄物資を置く。大体800から1,000人分だね。3町会で、うちが1,550。中町が700、リバーさん（西新小岩のマンション）は、高い建物だから、水の場合にはどうってことないが2,200所帯で約5,000人。人数から行くとまあ、備蓄も不足。避難も絵に描いた餅。自分だけが生きようなんて気はないがね（笑）。数字もすらすらでてくる。

輪中会議は必ず参加・勉強会は自主運営

NPOや大学とこうやって、連合町会がお付き合いしているのは良い面がある。

葛飾区は19連合町会あるけど、いろんな勉強や交流をした結果、ここは評価されてきたんじゃないの。

輪中会議のように先を考えるのは苦手だが、知恵を出し合い、NPOや大学とは、持ちつもたれつと考えて、町会是人集めを心がけている。理想を持って、ただ強引に進めようとは思わない。3丁目の勉強会は淵井さんたちががんばっている。この6月の勉強会は勉強の後、もちより交流会をするというので参加したが、干渉はしない。

地方の時代、行政も能力アップしてきた。区長に直接意見をいうことは満足感もある。鈴木会長いわく、意見を受け止めたら実行いただかなくてはこまる。と手厳しい。

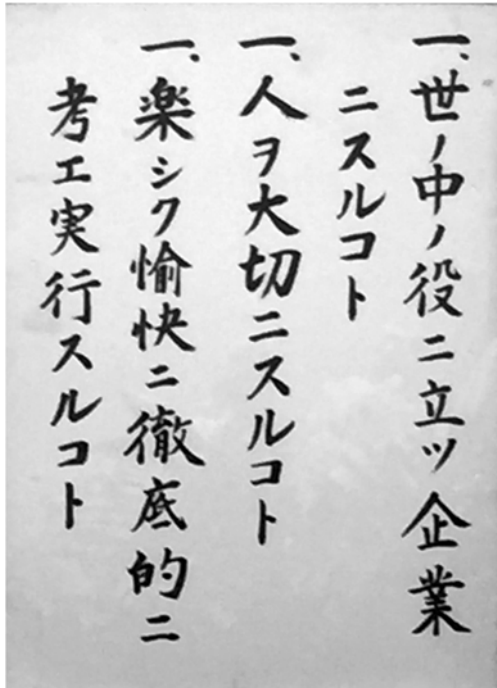
鈴木会長が逝ってしまった後、2016年にはいつて、勉強会メンバーは区長へ提言を届け、輪中会議で発表した。鈴木会長は、千の風にのって見守っているに違いない。

記：渡邊喜代美

NPO ア!安全・快適街づくり理事

徳倉眞治 会長のこと

徳倉会長の社訓



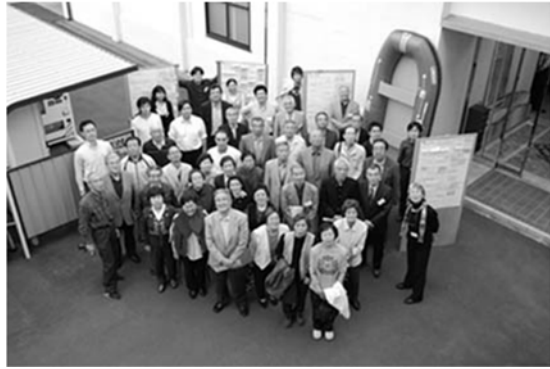
ご自身で集めた地図や資料を机いっぱいに
広げて講義をする徳倉会長

加藤先生コメント

時にはやりすぎではと感じるほどの行動力、意気込みに圧倒されることもありましたが、何かを創る、何かを変えるためには、強い意志、強いリーダーシップ・行動力が必要であることを学びました。もちろん当たり前のこととして分かっているつもりでしたが、徳倉さんを前にして本当に実感として理解できたと感じています。

ゴムボートの寄贈

第5回ワークショップ（2008年5月）の後、徳倉会長から各町会に組み立て式のゴムボートが寄贈された。会長は、葛西海浜公園でのボート乗船下船イベントにも参加していたので、ゴムボートがあると地域の人たちが楽しみながら訓練できるということを感じられたのだろう。このゴムボートは、連合町会が主催した中川での水防訓練でも使われた。



徳倉会長が寄贈されたボートの前で記念撮影



葛西海浜公園で開会挨拶を述べる会長



シンポジウムで発言する会長

私が徳倉会長に最初にお会いしたのは、2007年12月、大成化工で行われた第1回ワークショップの時だった。徳倉会長に自己紹介をすると、会長から「君は、このゼロメートル地帯の問題をどう思うか？」と質問された。その時、大学四年生だった私が何と答えたかは覚えていないが、会長は「これは何十万人もの命の問題です。それなのに、ほとんど対策もとられずにいる。誰かが何とかしなくてはいけない。」と言われた。そして、まっすぐに私の目を見て「もしも私が君くらいの年齢だったら、人生をかけてこの問題に取り組めますよ。それくらい、する価値のあることです。ひとつ、よろしく。」と力強く声をかけられたことを覚えている。

また、いつぞや大成化工の近くのそば屋で徳倉会長に昼飯を御馳走になったとき、昔、大成化工はセルロイド加工を行っていたこともあり、よく工場で火事を起こしていたという話をされた。会長は、そんな昔話の終わりに「この地域の方たちにはご迷惑もおかけしたし、よくお世話にもなった。だから、最後に、この地域の役に立つことをしたい」と笑顔で話されていた。

記：塩崎由人
NPO ア！安全・快適街づくり
東京大学生産技術研究所

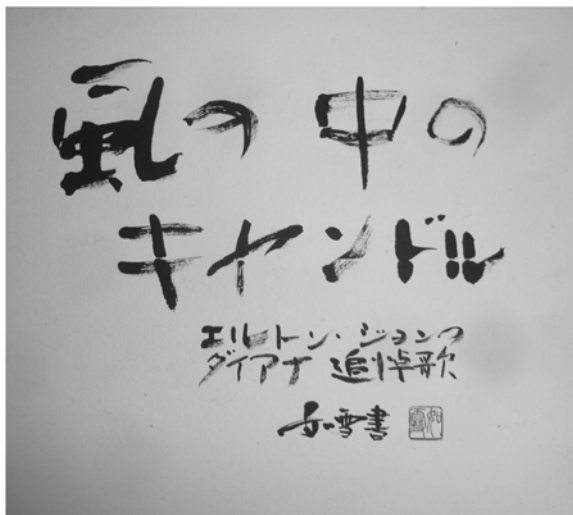
石川金治 理事長のこと

石川さんとの偶然の出会いがなければ、私は今頃さぞかしつまらない人間になっていただろうとしみじみ感じます。石川さんとの出会いは、確か 2002 年頃でした。当時、私は地震防災まちづくりを研究していました。石川さんは私の講義に出席なさっており、そのあとの懇親会で「水害についても研究したらどうか」と私に声をかけてくださいました。私自身、濃尾平野の海拔ゼロメートル地帯で生まれ、育ったにも関わらず、いつの間にか水害リスクについて忘れており、水害対策は河川管理者に任せておけばよいと根拠なく考えている自分に気づかされました。ある意味、与えられた既成概念の内側で考え、それを深めることが研究であると大いなる勘違いをしていたのかもしれません。そこから現在につながる幅広い活動が始まり、その過程でここには書ききれないほどのたくさんのことを学ぶ機会をいただきました。特に、幅広い視野、多面的な視点、ゆとりのある、遊び心のある発想、何事も受け入れる度量、自然な感じ、石川さんが醸し出す雰囲気、既成概念を超える機会を創るということを感じたとして身に着けることができたと感じています。

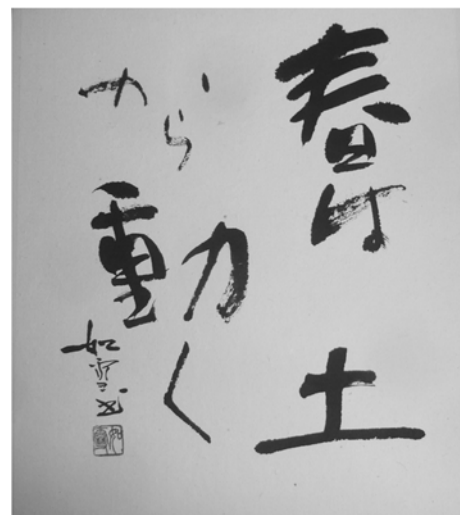
記：加藤孝明

NPO ア！安全・快適街づくり 理事

東京大学生産技術研究所 准教授



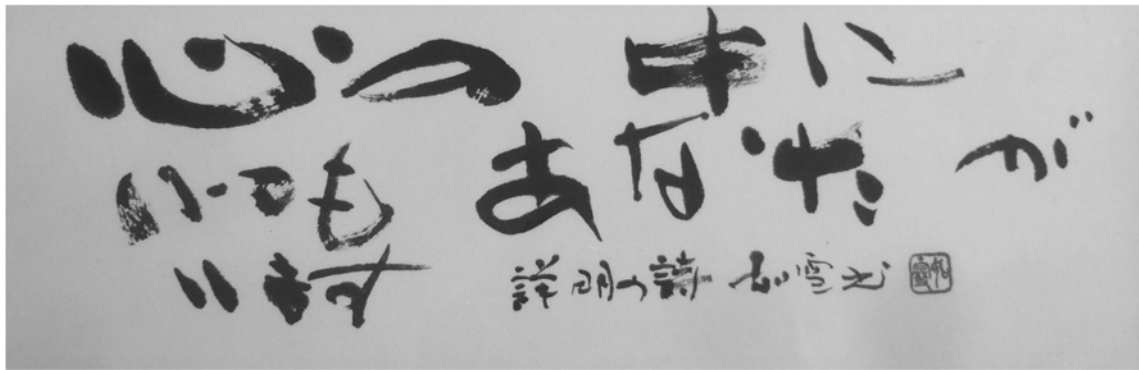
Elton John “語る会”で BM したいです…。



如雪の思いが伝わってくる…………。

霊前ご挨拶の折に数枚の色紙を拝見し映しとった中から選んでみました。

如雪は夢多き青年のよう・・・(渡邊)



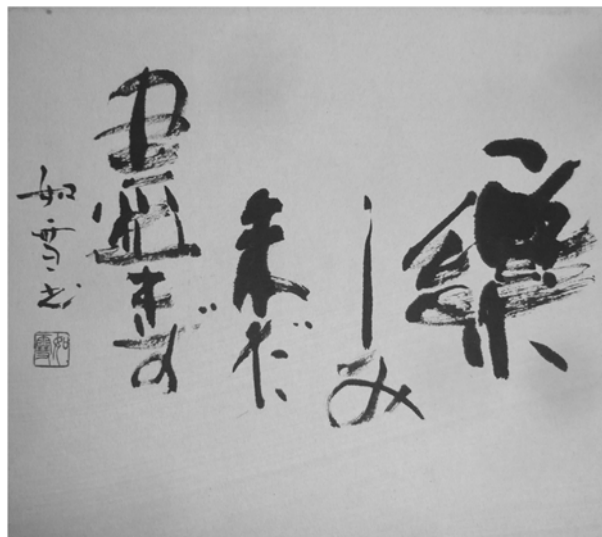
ご霊前に置かれた書 石川理事長の書 いつも穏やか（写真撮影は渡邊）

- ・ 題名は「母さん」
- ・ 第9回「かながわ書道まつり」チャリティー小品出展
- ・ 出典・詩人名「母親というものは」葉祥明

いつまでも
いっしょにいたいけど
それは無理というもの
でも
こころの中には
いつも あなたがいます
私のかあさん



お花の好きな石川理事長に NPO ア！から
お届けした献花がみごとに開いたと娘さん
の石川和代さんから、写真が届きました。



如雪よ そのころは……。盡きず……。

「安心・快適街づくり」に向けた活動の継続

NPO ア！安全・快適街づくり

理事長 成戸 寿彦

本年 2 月、我々のNPOにも訃報が訪れました。石川理事長が急逝されたのです。当NPOの創始者であり事実上の牽引者であった石川理事長のご逝去は、NPO活動の継続をも揺るがすような事態ではありましたが、緊急の理事会を開き石川理事長のご遺志を引き継いでいこうということを確認しました。そして私にとりましては青天の霹靂のような事態ではありましたが、理事長の重責を担うこととなりました。はなはだ微力ではございますが、皆様方のご協力をいただきつつ、安全・快適街づくりを推進してまいりたいと存じます。よろしくお願いいたします。

さて皆様方ご案内のように昨年の11月には鈴木西新小岩三丁目町会長がまた本年の2月には徳倉大成化工会長がお亡くなりになりました。

石川理事長を含めたお三方は、当NPO活動の草分け的な存在ですので、この機会にNPO発足当時の状況を振り返ってみたいと思います。

当NPOの設立総会は 2002(平成 14)年 5 月 10 日に開催されていますが、それに先立つ 4 月に二度ほど石川さんが私のところ(当時東京メトロの前身である営団にいました)を訪問されています。用件は、ある地域でスーパー堤防を伴う街づくりの勉強をしたいので付き合ってくれないか、というものでした。皆さん方もそうだったと思いますが、石川さんの最初の頼み方は大変軽い調子なんですよ。それにあの人柄ですからついつい受けてしまって気が付いたら今日に至っているというわけなんです。

話を当時に戻しますと、石川さんの構想はこういうことでした。当時、荒川下流工事事務所やリバーフロント整備センターはスーパー堤防に関心を持っていたので、大成化工という具体的な地域でその勉強を一緒にしてみよう。そのため石川さんが懇意にしていた当時のリバーフロント整備センター松田理事長を訪ねて、勉強会が実現したわけです。石川さんの発想に徳倉さんが協力して動き始めたというところです。

私の役割はその組織を動かし勉強を深めていくことでしたので私が座長となり、荒川下流工事事務所のほか東京都都市計画局(現在の都市整備局)と建設局、葛飾区などの関係者さらに石川理事長や徳倉副理事長などNPOのメンバーなどの皆さんを加えて勉強会を開催したわけです。平成 14 年 7 月のことでした。

勉強会では平井 7 丁目北部区画整理やパークシティ市川などの現地見学もしましたがほとんどはスーパー堤防と区画整理や再開発などの事業との合併施行をスムーズに運ぶにはどうすればよいか、といった検討が主でした。例えば既存の区画整理事業や再開発事業に加えスーパー堤防事業の補助金をどう組み合わせれば事業として成立するかとか、各々の組み合わせにおいてどのような構造にすればスーパー堤防として成立しその場合の関係者はどの程度になるかとかいったことを、大成

化工周辺の地域を例にして勉強したわけです。会場は東京都の皆さんが参加しやすいようにと都庁の会議室をとっていただきました。区など地元の方々には御足労をおかけしましたが、そのような勉強会を4年度にわたって行ったように記憶しています。

スーパー堤防という事業は、他の事業と組み合わせねば実現しにくい分かりづらい事業です。我々NPOの役割は、その分かりづらい事業を住民の皆さんに先立って勉強し出来ればアドバイスを、またもし事業に至るようであれば行政などと地元の方々との関係がスムーズになるようにすることがその役割ですので、あらかじめ勉強をしておいたわけですが、今回の勉強ではその難しさが浮き彫りになったようです。

しかしその間に石川理事長の思いはハードからソフトの方に向いていました。石川理事長の当時の述懐です。「(NPOを立ち上げたものの)地域の人から見れば『この馬の骨だ』という感覚でした。だから、このNPOを認めてもらう方策はないかといういろいろ考えました。」(街づくりニュース vol.20)ということで、地元に関わり込む方策を考えていたのです。まず水位表示板を立てる試みから始めていますが、これとて簡単ではなく苦労しているときに当時の鈴木町会長のご理解で西新小岩三丁目に立てることができ、葛飾区全体にまた東京都の他の区や全国へと広がることになったわけです。

その後のことはここに改めて書くこともなく、ゴムボートの乗船訓練とか、「自助・共助・公助」の取り組みからシンポジウムや輪中会議へと発展しているところです。中でもこうした活動の一環として地域の皆さんと取り組んだ「高台化」の実現が青木葛飾区長のご英断で実現の運びに至ったことは、特筆すべきことでしょう。

さて、NPO発足当時のことから地域の皆さんに受け入れていただくまでの概略の経緯を、当時の石川理事長・徳倉会長・鈴木町会長の存在を振り返りながら綴ってまいりましたが、お三方がこの地域に残された足跡を、あとを継ぐ我々はどのように受け継いでいったらよいのでしょうか。それを地域の皆様方や研究者などと一緒に考え、また行動していきたいと思えます。

例えばこの地域が都内でもまれなほど豊かな水辺空間を有した地域であると評価されつつありますが、ここに住んでいる方々がそれをいかに生かした街づくりをするか、が問われているともいえます。東京都においても今、長期計画である「都市づくりのグランドデザイン」を策定していますが、この中でも区部東部地区における「水辺空間を生かした街づくり」が強調されることでしょう。

今までこの地域では、浸水にいかに対応するかについて取り組んできましたが、地域の方々に小・中学生の皆さん方を加え、「親水型の街づくり」に目を向けて両輪でいく時代に来ていると実感しています。当NPOとしてもこうした動きに応じつつ、今後とも、地域の皆様方のお手伝いをしてみたいと存じます。よろしくお願いいたします。

27 年度の活動結果と 28 年度への展望

NPO ア！安全・快適街づくり

宇賀俊夫

27 年度の活動結果と 28 年度の展望についてご報告いたします。

27 年度に特筆されるべきことは長年にわたり地元の皆さんからの強い要望があり、当 NPO としてもそれを支援していた新小岩公園高台化が区の事業として実施されることになったことでしょう。その完成までにはまだまだ 10 年近くの歳月を要するといわれていますが、「新小岩公園防災高台整備事業」として正式に発足したのは画期的なことです。広域避難場所として指定されながら、水害時には水没しその役割を果たすことが出来なかった新小岩公園が盛土され、防災公園として生まれ変わるようになったのは朗報と言えます。

この動きをとらえて「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」では「新小岩公園高台化など新しい状況を共有し、地域の未来(ビジョン)を共有する」ことをテーマにした輪中会議を 28 年 3 月 20 日に開催しました。この会議には各方面から 100 名近くの方が参加し、過去 1 年間に実施してきた活動を報告すると共に意見交換を行いました。特に、西新小岩 3 丁目の有志による高台整備に関する勉強会のメンバーから、勉強会の成果として取りまとめ区に説明を行った提言の報告があり、注目を集めました。提言の内容は次の段落でご紹介します。「協議会」としては今後も輪中会議を開催して参ります。テーマとしては「水辺ルネッサンス」の旗印のもと、七曲がりのテラスの有効活用策など親水まちづくりに役立つ活動を取り上げることが考えられます。

西新小岩 3 丁目の有志の皆さんによる高台整備に関する勉強会については過去 2 年余りにわたり NPO の支援を受けながら、原則として毎月第 1 土曜日の夜に会合を開いて勉強を行ってきました。その結果、5 項目からなる提言を取りまとめ、区に説明を行いました。目下区からの回答を待っているところです。

提言の内容は次の通りです。(1) 中川(荒川)左岸、中川七曲り、新中川及び総武線に囲まれた新小岩北地域の輪中構造への整備、(2) 西新小岩三丁目の避難場所たる新小岩中学の浸水防止策、(3) 西新小岩三丁目からの避難経路整備、(4) 近く建設が計画されている河川防災ステーション整備に当たっての要望事項および(5) 関連・付帯する要望の 5 項目です。

はじめに

今後区の回答を待って提言の実現につき引き続き働き掛けると共に、現在の枠組みを離れて新たな勉強会を立ち上げ、それに新小岩北地区の他の町会の皆さんにも参加してもらい、更なる提言のブラッシュアップを図っていくことも考えています。

また、葛飾区が目下取り組んでいる新小岩北地域公共施設整備計画について、水害に対する備えが現計画で十分なものかどうかを確認し、不備な点があればそれを正すよう働きかけを行っていきます。

葛飾区の地域活動団体に対する助成制度を利用した事業については、27年度は前年度に引き続き「災害発生時の避難方法について親子で話し合う」ことを狙いとしたワークシートを使った学習を上平井小の6年生対象に実施すると共に、上平井小・松上小で防災に関する出前講座を実施しました。この他、うらら保育園で職員・保護者を対象に出前講座を実施しました。28年度もさらに対象を広げて「ワークシート」を使った学習や出前講座を地域の小学校・中学校、保育園。幼稚園などで実施していく予定です。

昨年には七曲りのテラスも整備され、堤防の補強工事も着実に進められてきました。広域避難場所の新小岩公園の高台化も事業化が決まりました。それに隣接する形で河川防災ステーションも建設されるものと思われます。それに伴い水辺に親しむ環境が徐々に整いつつあります。

28年度は「水辺ルネッサンス」の旗印の下、皆さんと一緒に親水まちづくりに取り組んでいきます。NPOの設立目的も荒川と江戸川に挟まれた東部の低地帯を水害から守り、この地域が「安全で、水と緑の安らぎのある東京一番の街」になることを願って主として防災という観点からまちづくりのお手伝いをすることにあります。今年も地域の皆様と手を携えて頑張ってまいりますのでよろしくお願いします。

以上

浸水都市から親水都市へ

NPO ア！安全・快適街づくり 理事

東京大学生産技術研究所 准教授

加藤孝明

せっかく川沿いで暮らしているのに、浸水リスクにさらされているだけでは意味がない。親水性のある豊かな暮らしをしよう。そうすればプラスマイナスゼロ、むしろプラスになる可能性もあるのではないか。以前、活動の中からでてきた「浸水と親水」というキーワードである。ダジャレでもあるが、とても意味深い。自然からの脅威と恵みを balan

この図は、東京の都市づくりを取り巻く現状や課題がまとめられた「東京都市白書 CITY VIEW TOKYO」（東京都、平成 28 年）の 35~36 ページから抜粋したものである。

「東京都市白書 CITY VIEW TOKYO」は、東京都ホームページからも閲覧することができる。

<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/topics/h28/topi002.html>

FLOOD C
水害に強いま

台風や集中豪雨などから都市を
水害対策を講じ、東京全域で安



スよく暮らしの中に埋め込み、幸せな暮らしを実現しようという志向である。さらに首都大学市古先生らの研究では、日頃、親水性の高い暮らしをしている人は浸水リスクに対する意識が高いという調査結果がある。実は親水性の高い暮らしは実は浸水リスクへの対応につながるのである。浸水リスクへの備えとしていろいろな「知恵」が溢れる暮らし、親水性のある豊かな暮らし、それを実現する過程で豊かな生活文化を創り出そう。

七曲りの川の流れの線形、それが創り出す景観には、世界的にみても類ない魅力がある（写真参照）。都市づくり・地域づくりの重要な資源である。しかしこれまでは、七曲りが七曲りとしてただ存在しているだけである。この資源に目を向けよう。この資源を地域づくりのためにアピールしよう。今後の地域づくり、都市づくりを考える上で重要なポイントだと思う。



COMMENT » TAKAAKI KATO

加藤孝明 東京大学生産技術研究所准教授

地震防災を基本に気候変動をにらんだ水害リスクを軽減する都市やまちの在り方について研究を進めている。博士(工学)

水害リスクと賢く共生する親水都市へ

江戸時代の利根川の東遷、1911年に始まる荒川放水路の開削など、これまで高い技術力をもって水害リスクを確実に制御してきた。そして今、気候変動という新たなフェーズに対応し、今後確実に高まる浸水リスクに対して新たなチャレンジを始めつつある。一見、広大な海拔ゼロメートル地帯に市街地を抱える東京は浸水リスクが高い。しかし一方で、そこには親水空間が広がる豊かな生活文化が培われてきた。次の時代に向けて、大都市東京の水辺空間を見直し、河川と市街地との関係性を再考する必要がある。川の恵みと脅威をバランスさせた水害リスクと賢く共生する新しい文化を創出することが今後の方向性である。これは世界唯一の気候変動の適応モデルとなるだろう。



提供：[中川の七曲り] ©中日新聞社

ア！安全・快適街づくりと共に10年

平成28年4月
東新小岩5丁目町会 会長：青柳 勇

昨年度ほど、不思議な年に思える1年は、そうはないと思う。

西新小岩3丁目の鈴木一喜会長が11月に亡くなられた後、たて続けに、大成化工の徳倉会長、そして当NPOの石川理事長が逝去されました。まさに此の新小岩地域を「安全・快適な街」にしようと行動を共にされていた方々がなくなった1年間でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

私もNPOに参加して丁度10年になると思う。いろいろと此の地域の事を勉強させていただき、自分達の住んでいる街の事を巾広く考えるようにもなりました。

快適な街、快適な葛飾区にするための「私の好きな街」構想も石川理事長の案である。

そこで私なりの好きな街の考えを述べたいと思います。

それは「わくわくサイクルロード葛飾」という構想です。新小岩公園の高台化の進行と共に、サイクルロードの整備を行うことです。

葛飾には、江戸川、荒川、中川、綾瀬川等河川にめぐまれ、更にユニークなキャラクター（柴又の寅さん、亀有のこち亀、キャプテン翼、モンチッチ公園）等、そして一番のメインは水元公園です。これらを結ぶサイクルロード、これこそ「わくわくサイクルロード葛飾」になると思う。

みんなで、良い知恵を出し合ってより良い新小岩、そして葛飾を造っていかうではありませんか。

モンチチ公園の経緯と今後

西新小岩五丁目 町会長
町山光司

西新小岩五丁目に公園が出来る話が入ったのは、6年前の平成22年でした。区役所に倉沢議員他4名で青木区長に面談し、区公社が株式会社セキグチから土地契約し、区の持分に現在なっていると話を聞きました。

平成24年から具体的な設計に入るため、検討委員会を立ち上げることになり、町会長の私に白羽の矢が回ってきた。それから平成27年3月まで、都合7回地元の皆さんと意見交換をしてみました。意見交換の前、公園課、防災課、の打ち合わせを打ち合わせを自宅で十数回行い、その都度前上平井消防所長菊川様に相談、意見を出してもらいました。時期として3.11の東北大地震発生もあり、防災倉庫を国の基準の5%より大きなハードを区に要望しました。プロ消防関係者に地域の防災資源を活用して、地震や水害などの災害にどう立ち向かっていくか地域、町連の皆さんと検討して来ました。

当初、公園を3Mの高台にする意見等もありましたが、防災課から予算は難しいとの答えがありました。西新小岩五丁目は、学校、幼稚園、集会所等公的施設は何一つありません。そして、木造住宅が密集し、道路は江戸時代から何ら変化のない、地形が残る細い道路になっています。先般も火事が発生し、初期消火が出来ず、2階建て全焼するも消防車すら道路の関係で、平和橋通りから消化ホースを引っ張った現実です。モンチチ公園開園を機に地域の人たちの防災意識の向上と、自助、共助を高め、防災のリスクをいかに低くするかを考えているところです。

毎年防災訓練をしている当町会において、新しい、広いスペースで、地域、消防署、町会と共有しながら少しずつ先が見えてくると思いました。

平成28年4月9日「モンチチ公園完成記念式典」には、多数の関係者の姿を拝見して嬉しく思いました。かつて日本経済発展に貢献した輸出玩具の生産拠点として歴史的場所であるとモニュメントに書かれておりました。

公園は私的企業のキャラクター「モンチチ」の愛称名を持った公園は、目面しいこともあり、当日はNHK他、J/COMのカメラが入り、読売新聞の囲み取材を受けました。

早朝8時前から、新小岩北地区連合町会24名、区21名のスタッフが集合し、当日の00000000の説明、挨拶をし、9時30分開会の時間を待ちました。主催者トップとしてあちこちから説明を求められ、式典終了まで、身心共に疲れ、無事に閉会したときは安堵し、一気に充実感さえ感じました。

終わりに、前石川理事長にはふれあいまちづくりの時、我が町会の席に来て自己の体験した多くの話を笑顔で話してくれたことを思い出しました。合掌。



民生委員として何ができるか!!

新小岩北地区民生委員児童委員協議会

会長 津村 寿子

民生委員として輪中会議に参加させて頂くようになってから5年、新小岩北地区を安全で快適な地域としていくため、連合長会、行政、専門家、NPO、地域の方々と一緒になって、大規模災害(水害)に備える為の取り組みを話し合い、知識や経験を共有し、勉強させていただいております。

「私達民生委員として何ができるか!」と3.11東日本大災害後、東京都民生委員協議会の提案もあり、三地区合同(新小岩、奥戸、新小岩北地区)でこの5年間に新小岩駅前(南北)、新小岩ふれあいまつり、フードフェスタ等で「東日本大震災子供応援募金活動」をさせて頂きました。(地域の皆様には、ご協力頂きありがとうございました。)

新小岩北地区の民児協では、葛飾区社会福祉協議会を通じ、平成24年10月と、平成25年6月に、いわき市社会福祉協議会平地区におけるサロン活動(南白戸地区いきいきサロン)での交流と復興の視察に行きました。

又、平成28年4月13日には、新小岩地区の研修会「いわき市平地区訪問活動」に民生委員児童委員活動を考えるよい機会として、ご一緒させていただきました。その研修会で平地区保健福祉センター所長の鶴沼 宏様より「いわき市の復興に向けたまちづくり」のお話を、平地区民生委員児童委員会長の吉田 智昭さんより「震災時から現在までの民生委員活動について」の体験談を伺い、現在も心身ともにご苦労されている様子に頭が下がりました。意見交換のとき、自助、共助、公助、の3活動があるが、まずは自分が助からねば、他者への援助は無理の一言を強調されていました。研修後、2年前に訪問した南白土地区の民生委員さん達が、わざわざ訪ねて来てくださり、再会を喜び合いました。

地区の景観は2年前とは大きく変わっていました。海も見えないほどの高い堤防が築かれ、豊間中学校は取り壊され、高台化された宅地造成工事が進む中、まだまだ仮設住宅での生活を余儀なくされているなど、皆さんが復興に向けて頑張っている様子から、今回も実際に足を運ぶことにより、多くの勉強をさせて頂きました。

まずは、自分の地域をもっと大切にして、“ふれあい”を大事にし、今後の活動に役立てていきたいと思います。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

安政大地震を伝える石地藏&浸水しなかったお地藏様

東新小岩七丁目町会長
葛飾区文化財保護推進委員
中川 榮久

西新小岩五丁目 21 番 20 号の医王山東光寺（真言宗）には、安政 2 年（1955）10 月 2 日夜、江戸直下型大地震がこの地を襲い、東西新小岩（旧上平井町）でも、上品寺の閻魔堂が倒壊するなど、多くの被害が発生しました、東光寺に安置されていた、石造のお地藏様も破壊されてしまいました、この大災害を忘れることなく、後世に伝えるため、当時の住職、有志の皆さんが、新しく造った、石地藏が現在安置されています。（葛飾区登録有形文化財に指定されています）

東新小岩六丁目 24 番 4 号に安置されていますお地藏様は文政年間（1819-29）頃まで、上平井村に安置されていましたが、諸事あって上小松村の西藏院（江戸時代上小松天祖神社の別当寺）に移そうとしましたが、途中で全く動かなくなってしまったので、その場に置いて前後策を考える事としました、すると翌日から毎日雨が降り続き、村の田畑は、水浸しになってしまったが、不思議なことにお地藏様の周りだけは、水溜りになっていませんでした、それを見た、村人達は、その場所にお地藏様を安置しました、その後村では災いが起こらなかったそうです。



安政大地震を伝える石地藏



浸水しなかったお地藏様

自動車事故を起こさないコツ

NPO ア！安全・快適街づくり

高田信一

車を運転中に交通事故を起こさないコツ、その**基本原則の第一**は、経験年数を何年重ねても初心者の心構えを失わないことである。

車がスピードを出せるのは運転者の技術ではなく、私が免許を取った頃（昭和三十二年）

に比べれば、最近は車の性能も道路状況も当時より格段に良いからである。また、車を使うのは乗ることだけが最終目的でなく、人や物をできれば予定の時間内に目的地へ運ぶことである。だから、車を使わなくとも運べる物や行ける場所には、徒歩か電車やバスなどの交通機関を使うことをためらわないのがベテラン運転手だ。

基本原則の第二は、自分以外のドライバーはすべて運転未熟者と心得、これを見分けて近寄るなだ。即ち、未熟とは運転技術の拙劣にはあらず、我（われ）中心の身勝手な運転をする人間性である。

例えば交差点の右左折で青信号が赤に変わる前に、自分の後ろの車が一台でも多く曲がれるように、前の車に続いて速やかに進行すべきところを、不要な車間距離をあけてノロノロと曲がるくせに、いざ直線の広い道路に出るとスピードを上げて前方の車にびったりくっつき、あたかも自分はベテランだと見せつける奴だ。

また、ウィンカーを曲がる直前まで出さない運転者。互いに譲る精神に欠けて先を争う割り込み、追い越しの常習者。更に、交差点手前の注意信号で原則せず、逆に速度を上げて赤信号をつっぱしる者。これらのいずれもが未熟なドライバーの典型である。

そこで、小松川交通安全協会の本部役員として私が長年提唱してきた「高田式 S A F E T Y F I V E（セイフティ・ファイブ）を**基本原則の第三**として読者に紹介したい。

- ①Speed（スピード）～ 道路状況を読んだ適切な速度で走るがプロ。
- ②Stop（ストップ）～ 交差路を一時停止と徐行で余裕を持って通る熟練者。
- ③Space（スペース）～ 適切な車間距離と後方確認に目が四つ。
- ④Signal（シグナル）～ 交差点手前の注意信号で無理せず止まれる余裕。
- ⑤Sign（サイン）～ 右左折のウィンカーを早めの合図でこそ、他車は納得。

そして、**基本原則の第四**は言わずと知れた交通違反三悪の追放だ。即ち、無免許、酒酔い、駐車違反。これは熟練者も未熟者も関係ない自動車運転の大原則だ。

最後に、**基本原則の第五**を本日の読者に内緒で一言。「真のベテラン運転者は白バイ、パトカーに決して注意されない、捕まらない？」

－ 以上 －

自然の猛威に立ち向かう勇気とチームワークを目指して

第58 次南極地域観測隊 岡田雅樹

この度、私は第58 次南極地域観測隊の副隊長兼越冬隊長として南極昭和基地に派遣されることになりました。前回越冬隊に参加した第49 次隊から9 年ぶり、夏隊に参加した第55 次隊からは3 年ぶりの南極派遣となります。今回の観測隊の隊員は、越冬隊33 名、夏隊35 名となる予定で、現在隊員の選考と訓練を実施している段階です。

第55 次観測隊に参加した際は、二上小学校の児童の皆さんに応援をいただき、寄せ書きをもって南極に赴きました。南アフリカ共和国のケープタウンを経由して、飛行機を使っての南極に入り、ベルギー国が運営するプリンセスエリザベス基地(PES)を拠点として活動を行いました。日本の観測隊が運営する昭和基地から500km 以上離れた場所に位置しています。

第58 次観測隊では、オーストラリアから砕氷船しらせに乗船し3 週間ほどの航海の後、昭和基地に入り越冬隊として活動する予定です。出発は今年11 月末、2 年後の平成30 年3 月末に帰国する計画で準備を進めています。

越冬隊の活動は、南極の冬を33 人で生活をしながら、南極の自然を観測してデータを持帰ることが任務となります。そのための準備をおよそ1 年かけて行い、必要となる物資の調達、訓練などを行いながら、現在昭和基地で越冬している第57 次観測隊と情報を交換しながら、スムーズな引継ぎを行うために準備を現在進めているところです。越冬中の生活は、毎週のように訪れるブリザードをはじめとする南極の厳しい自然環境に対処し、100 を超える観測機器を維持し、基地を運営しながら、健康に楽しく1 年を過ごすことができるように努めます。越冬隊員は毎日ミーティングを重ねて危険を予知し、助け合いながら活動を行うことになります。

国内においても、震災や火山活動など自然の猛威に驚かされる事態が頻発しております。現代のような利便性の高い社会においても、十分な知識を習得し、可能な限りの準備を怠らず、困難な事態に対して団結して立ち向かうチームワーク活かすことが、いざという時には最も大切な知恵ではないかと思います。



2013 年12 月8 日、第55 次観測隊で
二上小学校児童の寄せ書きと共に
PES にて撮影

地域の方々から学ぶ

葛飾区小中一貫教育校新小岩学園松上小学校長

渋谷英一

私は、昭和 60 年から平成 7 年まで教員として、平成 15 年度から 19 年度まで校長として上平井小学校に勤務しておりました。亡くなられた鈴木一喜様をはじめとして西新小岩 3 丁目の皆様には、たいへんお世話になっておりました。このたび、ご縁があって、7 年ぶりに新小岩地域の松上小学校に戻ってきました。この輪中会議のことは、立ち上げの頃から存じ上げておりましたが、平成 26・27 年度とこの会議に出席させていただき、この取り組みが着実に前進していることを知り、地域の方のお力と関係の皆様のご努力に改めて敬服しております。

このニュースの第 20 号に掲載されている、亡くなられた石川金治理事長の巻頭言を読ませていただき、この取り組みのご苦勞の一端を知ることができました。水位表示板は、新小岩地域がいかに低い土地であるかを知る目印になりますが、不動産屋さんの反対など、困難を乗り越えての設置であること、各学校に配備されているボートもこの取り組みの成果であることなどを知ることができました。

学校の取組としては、寺島玄様による 6 年生向けの講演会、また、3 年生対象の地域の学習があげられます。寺島様の新小岩地域の歴史のお話では、「カスリーン台風」についても詳しく説明され、この地域が水害に悩まされてきたことを知ることができました。3 年生の学習では、東新小岩 7 丁目町会の中川会長様、塩崎様、増澤様にお話をいただき、子供たちの防災意識を高めることができました。

私は、松上小学校に赴任して、3 年目になりますが、一度も避難所運営会議を開催できていません。地域の皆様のご努力に比べての学校の取組の遅れを深く反省させられています。この避難所運営会議は、大規模地震を想定しての準備会議ですが、水害の際も、学校が避難所になります。まずは、避難所運営会議を開催し、避難所運営訓練を行うことが当面の目標となります。水害を想定すると、現在 1 階にある備蓄倉庫の位置が問題になります。水害を想定すれば、2 階 3 階に移さなければなりませんが、地震の避難所と考えれば、1 階の方が便利です。現時点では、水害よりも大規模地震が起きる可能性の方が高いと思われます。このような点も、避難所運営会議を実施する中で、地域の皆様と協議していかなければなりません。今後も、輪中会議に出席させていただき、地域の皆様に学びながら、自然災害への備えを前進させなければと考えております。

子育てひろば事業・子育て講座

「親子で語り継ぐ大水害の避難について」

社会福祉法人清遊の家 うらら保育園
園長 齊藤 真弓

NPO ア！安全・快適街づくりより、乳幼児の親子を対象に、低地帯である新小岩地域の河川・地盤の特徴を理解し、大災害への対策・対応について「親子で語り合い語り継ぐこと」の大切さを講演形式で啓蒙したいという、ありがたいお声がけを頂きました。

早速、当法人運営の認可保育園2園、学童保育クラブ3か所、そして、うらら保育園の地域子育て支援事業（＝子育てひろば事業…保育園・幼稚園に在籍していない0歳～6歳までの乳幼児を在宅で育児されている家庭に対して、うらら保育園の人的・物的社会資源を地域に開放し育児支援を行う事業）をご利用されているご家庭を対象に、講演会のご案内をしたところ、保護者・乳幼児約70名のご参加がありました。

講演会のちょうど1か月前は、台風18号がもたらした鬼怒川決壊による、栃木・茨城県の大規模水害の直後で、自然災害に対する関心が高まっていた時期でした。

参加者は熱心に講師のお話に耳を傾け、質疑応答の時間には、熱心に質問される方もいらっしゃいました。また、大勢の方々が会場内に展示されたパネルに注視されていました。

防災とは「命を守り、命を繋ぐこと」

ひとたび災害が発生すると、保育園に在園している乳幼児は「自力避難困難者」となり、保護者は「帰宅困難者」となります。地域で暮らす乳幼児も、家族だけでは日常生活の維持が不可能な状況になるといっても過言ではないでしょう。

保育園のネットワークを生かした防災情報を受信・発信し、まずは家庭から、次は隣家、そして町会…と、防災の輪を広げ、コミュニティづくりをしてゆくことが『防災＝命を守り、命を繋ぐこと』となり『未来を創り生きる人たちへの命のバトン』となることを、皆様のお力をおかりして、これからもメッセージし続けてゆきたいと思います。

「まちづくり支援事業勉強会」に参加して

水害時避難用高台整備勉強会（西新小岩三丁目有志）

金井 清一

昨年の輪中会議には、NPO 石川理事長、西新小岩三丁目鈴木町会長、お二人共出席されていました。また、大成化工(株)徳倉会長には昨年 11 月“街づくり”について話す機会を得ました。この 3 名の先輩の方々が続いてご逝去された事は非常に残念で“災害に強い街づくり勉強会”としては大きな財産を失いました。勉強会を通し、ご指導いただいたことに改めて、心から感謝申し上げます。

さて、“まちづくり支援事業勉強会”は西新小岩三丁目のメンバーで構成され、渋井リーダーを中心に、NPO の皆さんの協力のもと月 1 回の勉強会を約 2 年、24 回続けてきました。

今回、勉強会として以下 5 項目からなる提言をまとめ、葛飾区役所に提出しました。

- (1) 新小岩北地域の輪中構造の整備
- (2) 新小岩中学校の浸水防止策
- (3) 西新小岩三丁目からの避難経路整備
- (4) 河川防災ステーション整備に当たっての要望
- (5) 関連・付帯する要望

上記 5 項目の要望、提案を新小岩駅から、中川の川沿いにある我々西新小岩三丁目に向かって歩いている感覚で説明するとわかりやすいと思います。

新小岩駅は、2014 年、JR 東日本の統計によると 1 日平均の乗車人数は約 72,000 人で、葛飾区では最大の駅です。駅のホームに立つと高さは、北口のフィットネスクラブの 3 階に位置しています。つまり線路が盛り土になっているのです。荒川、中川、新中川の堤防に囲まれ、残る一方の南側が鉄道で盛り土になっているのです。これを利用して水害の時に被害エリア拡大防止を図る要望が 5 項目の(1)です。これは東日本震災後の平成 24 年 9 月に策定された内閣府中央防災会議の首都圏大規模水害対策大綱にも提言されています。

次に新小岩駅から小岩方面に向かうと新金線があります。この線を広域避難に利用したらどうか、というのが(3)です。

新小岩公園の盛り土の計画が発表されました。その盛り土を公園から中川まで延ばし、公園と中川の間に河川防災ステーションをつくり、情報発信ステーションとしての役割をも持たせたいというのが(4)の要望です。

この河川防災ステーションの位置づけは極めて重要であり、いくつかを下記に纏めると

- ・災害時に中川、荒川の両岸区、葛飾、江戸川、足立、墨田、江東の下町のコントロールステーションになること
- ・葛飾・江戸川の多くの人々の避難場所となっている新小岩公園への情報発信

- ・新小岩駅に集まる多くの帰宅困難者への対応指示
- ・松上小学校、新小岩中学校、北地域公共複合施設、建設中の総合病院といった新小岩北地区の各施設相互の連携強化

等が考えられます。

次に、駅から蔵前通りを渡り、斜めに中川に向かって歩くと、児童会館、新小岩まなび交流館、保育園があり、ここの約 6,700 m²が、平成 27 年 9 月新小岩北地域公共施設整備事業として発表され、複合施設になります。この施設に一時滞在機能を持たせたり、前にある避難所の松上小学校、新小岩中学校を補完する役割も担わせようという要望が（５）です。

最後の要望は項目（２）で、西新小岩三丁目の避難所は、新小岩中学校になっています。また、松上小学校も他自治会の避難所になっています。ただ、平成 26 年 3 月文部科学省検討会がまとめた“災害に強い学校施設の在り方”に照らしてみると新小岩中学校、松上小学校ともに不足しているところが多くあり、是非検討会のまとめた在り方に見合うよう対策をとってほしいという要望です。

これまで葛飾区役所に提出した勉強会としての提言について説明してきましたが、主にハード面での要望が多くなりました。

勉強会としては今後ソフト面での防災強化を進めていくことが重要です。

ソフト面では企業でよく使う手法の PDCA サイクルを活用すると良いと思います。目的達成のための計画(Plan)、計画の実行(Do)、実行したことを評価・検証(Check)、より良い結果を出すための計画の改善 (Action) の四つの工程を繰り返すことにより、次のステージへと進めていくことです。

災害にあっても被害を最小限にとどめる為に、組織として、個人として何が必要で、どんなことをすればよいのか、地域に密着したマニュアル、計画書を作り(P)、避難訓練を通して(D)、その検証・反省をし(C)、より良い方法見つけていく(A)。大切なことは何度も PDCA を繰り返すことによって、スパイラルアップさせ、被害を最小限に防ぐという目的を達成することにあります。そして、その行動を継続し、次世代へつなげていくことが我々の使命だと思うのです。

西新小岩三丁目有志勉強会報告

水害時避難用高台整備勉強会（西新小岩三丁目有志）

西新小岩三丁目町会とNPO法人「ア！安全・快適街づくり」は、これまで十二年以上にわたり、東部低地帯の地震時水害を軽減するために、行政機関のほか大学や近隣町会などと協働して活動を行ってきました。その結果、浸水に備えた水位標の設置、ゴムボートの普及活動、新小岩公園高台化の葛飾区都市計画マスタープランへの位置づけなど、一定の成果を挙げてきました。

しかしながら、実現化を目指したスーパー堤防は、区画整理を伴う大規模な事業であり、相当な年月を要することが判明したため、当面、明日来るかも知れない大地震時におけるもしもの水害に備えるため、緊急避難場所としての高台の整備を目指すことにしました。

そこで、西新小岩三丁目町会の有志住民は、NPO法人「ア！安全・快適街づくり」の協力のもと、高台整備の実現に向け、平成25年8月に東京都都市づくり公社から「水害時避難用高台整備勉強会」としてまちづくり支援事業の認定を受け、高台整備の勉強会と活動を行ってきました。

勉強会は、基本的に毎月1回第一土曜日に行い、25年10月より28年4月まで計25回実施しました。それぞれの勉強会の概要は次のとおりです。

○第1回勉強会（H25. 10. 5）

これまでのスーパー堤防事業化活動の総括と今後の勉強会のテーマについて

○第2回勉強会（H25. 11. 2）

葛飾区の地震火災時及び水害時の避難場所の現状と課題について

○第3回勉強会（H25. 12. 7）

葛飾区職員による葛飾区の過去の大洪水と水防計画について講義

○第4回勉強会（H26. 1. 11）

荒川下流河川事務所長による東日本大震災の教訓とより安全な避難方法やスーパー堤防整備計画の現状について（河川防災ステーションの紹介）

○第5回勉強会（H26. 3. 1）

葛飾区の西新小岩避難場所計画の問題点と小・中学校を避難場所とする要望の検討

○第6回勉強会（H26. 4. 5）

東新小岩7丁目町会長による同町会の先進的な共助体制と防災活動について講義

○第7回勉強会（H26. 5. 17）

勉強会が土木学会市民普請支援事業に採択されたことの報告とその助成金を活用した紅白旗配布による共助体製造りの提案、河川防災ステーションのスキームの説明

○第8回勉強会（H26. 6. 7）

土木学会市民普請支援事業の助成を活用した赤旗白旗の作成と配布方法について提

案、河川防災ステーション整備に伴うコミュニティ施設や避難施設の要望について

○第9回勉強会（H26.10.4）

地域の共助体制を強化する赤旗白旗事業の進め方と地震水害時の避難方法及び河川防災ステーションについての勉強

○第10回勉強会（H26.11.8）

「第7回輪中会議(H26.10.19)」の報告と「東部低地帯の地盤と中川左岸堤防について」の勉強

○第11回勉強会（H26.12.6）

「浦安液状化被害状況」と「西新小岩1,2丁目の中川沿川都有地に予定されている緩傾斜型堤防整備事業の西新小岩3丁目住民生活への影響について」の勉強と「東京都都市づくり公社への勉強会中間報告の提出について」の説明

○第12回勉強会（H27.1.17）

「河川防災ステーションの制度と避難広場計画の課題について」の勉強と「勉強会中間報告の葛飾区都市施設担当部長への説明」の報告

○第13回勉強会（H27.2.7）

「西井堀を埋め立て緑道整備を区が実施した経緯」の説明と「河川防災ステーション避難広場に望まれる施設、災害時避難の新たな考え方、西新小岩避難場所や避難路等の可能性、新小岩地域浸水被害軽減策を考える」をテーマにした勉強

○第14回勉強会（H27.3.7）

「西新小岩地区の地盤高や地形等を踏まえた避難経路」についての勉強と「河川防災ステーションと緩傾斜型堤防の整備を前提とした水害に強いまちづくりの施策について」、「第8回輪中会議（H27.3.28）」で発表する勉強会提言」を作成

○第15回勉強会（H27.4.11）

「第8回輪中会議に参加し勉強会の成果報告を行った感想と、葛飾区と東京大学加藤研究室の共同調査研究「浸水対応型市街地について」の報告

○第16回勉強会（H27.5.2）

これまでの勉強会の成果を踏まえた勉強会提言の確認と静岡市の津波避難デッキ見学の提案

○第17回勉強会（H27.6.6）

勉強会提言に含める新小岩地域の輪中化の考えや現状地盤高を考慮した避難ルート

の勉強

○第18回勉強会（H27.9.5）

勉強会提言の柱となる「新小岩地域の輪中化」、「新小岩中学校を浸水しない避難場所にする」、「西新小岩3丁目からの避難経路の整備」の勉強、津波避難施設見学会の説明

○第19回勉強会（H27.10.5）

前回勉強会を踏まえた「提言Ⅰ 新小岩北地域の輪重構造への整備」、「提言Ⅱ 新小岩

中学の浸水防止策」、「提言Ⅲ 西新小岩3丁目からの避難経路整備」の勉強、津波避難施設見学会の説明（日程の変更等）。

○第20回勉強会（H27. 11. 7）

11月12日に葛飾区より「新小岩公園防災高台整備事業」計画の説明があることと10月27日に荒川5区が広域避難対策協議会を設置したことの報告。勉強会提言の「提言Ⅳ 河川防災ステーション整備にあたっての要望主旨」、「提言Ⅴ 関連・付帯要望」の勉強

○静岡市津波避難施設見学（H27. 11. 20）

清水駅周辺の津波避難施設及び三保・折戸地区の津波避難タワー等を見学、静岡市防災課職員による、津波高さと避難施設を示した津波避難マップ及び各地区の地形や津波特性及び鉛直避難の考えや方法についての説明。

○第21回勉強会（H27. 12. 7）

葛飾区より11月12日に説明があった「新小岩公園防災高台整備事業」と11月20日の「静岡市津波避難施設見学」の報告。勉強会提言の「前文」と「提言Ⅳ 河川防災ステーション整備にあたっての要望」、「提言Ⅴ 関連・付帯要望」等の再検討

○第22回勉強会（H28. 1. 16）

「提言Ⅴ生活圏域に係わるその他要望」における帰宅困難者対策と新小岩北地域公共施設整備に合わせた防災対策について勉強

○第23回勉強会（H28. 2. 6）

提言の「前文」、「Ⅰ新小岩北地域の輪中構造への整備」、「Ⅱ新小岩中学の浸水防止対策」、「西新小岩3丁目からの避難経路整備」、「Ⅳ河川防災ステーション整備にあたっての要望」、「Ⅴ関連・付帯する要望」について、最終案のまとめに向けた検討

○第24回勉強会（H28. 3. 5）

提言の最終案について確認。勉強会提言を3月15日に葛飾区へ提出する時や3月20日の輪中会議で発表する際の役割について検討

○第25回勉強会（H28. 4. 2）

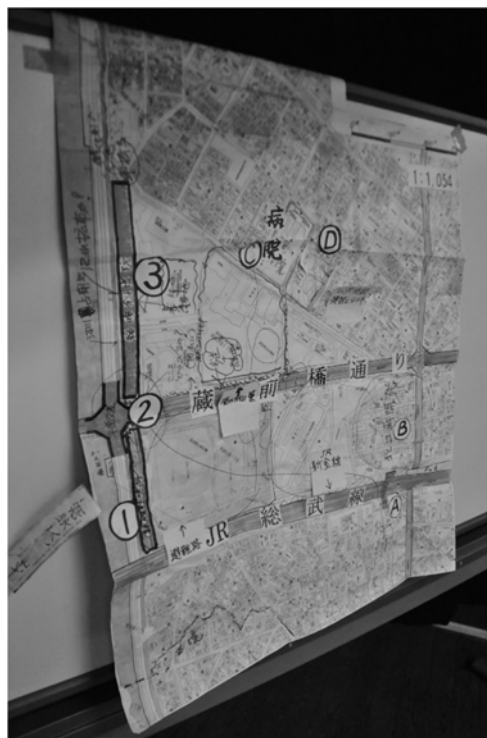
勉強会提言を葛飾区に3月15日に提出したと3月20日に輪中会議で発表したことの報告、

新小岩北地域公共施設について、水害時に避難施設として機能するよう高さの確保を葛飾区に要望することの確認

勉強会の活動をとおり、これまで町会の防災体制や区の水防計画の課題に取組み、区の水防計画の見直しや新小岩公園の高台化の必要性について葛飾区や荒川下流河川事務所へ要望するとともに輪中会議で勉強会の提言を発表してきました。その成果として、平成27年12月の「新小岩公園防災高台整備事業」が決定されました。さらに、活動の集大成として平成28年3月15日には葛飾区へ勉強会提言を提出し、3月20日には輪中会議で勉強会提言を発表して、当初の勉強会の目標を達成しました。

今後は、NPO法人「ア！安全・快適街づくり」と協働して、輪中会議等を通し近隣の町会と連携しながら、勉強会提言が、行政の災害に強いまちづくりの施策に反映され、可能なものから一つひとつ着実に実現されるよう注視しながら必要な活動を継続していくことにしています。

(文責：事務局 船山吉久)



水害時避難場所高台等整備勉強会の提言

水害時避難用高台整備勉強会（西新小岩三丁目有志）

I 新小岩北地域の輪中構造への整備

新小岩北地域は、荒川、中川、新中川の堤防と総武線の盛土に囲まれているので、水害エリアの拡大防止を図るために、堤防と盛土を利用して輪中を形成することを提言する。

輪中構造とするため、以下の対策を提言する。

- 1 平和橋通りのアンダーパス部に浸水遮断扉等の設置
- 2 新小岩駅構内南北通路部分の浸水遮断扉等の設置

II 新小岩中学の浸水防止対策

新小岩中学校は西新小岩三丁目の避難所に指定されている。しかし、水害時に1階のコンセント等が浸水すると停電し滞在型避難所として使えなくなる。それを防ぐため以下の対策を提言する。

新小岩中学校と松上小学校の敷地について、盛土による地盤高の復元、外周部の盛土、浸水防止壁、フェンス等を設置し、浸水しない学校施設とする。

III 西新小岩三丁目からの避難経路整備

洪水に見舞われると浸水すると浸水継続時間が長い東部低地帯では、地域外の広域避難が必要となる。

新小岩公園は江戸川区民の12万人の避難先に指定されて、大量の人々が新小岩公園に集中して収容能力を超え大混乱を来す恐れがある。このため、新小岩公園から他の安全な避難所に避難するための広域避難ルートの確保が必要である。

そこで、堤防道路など比較的標高の高い既存の施設を活用し、広域避難のための避難ルートの整備を提言する。（避難ルートのフロー図を参照）

IV 河川防災ステーション整備に当たっての要望

水害時に河川防災ステーションへ避難してくる住民に対処するため、防災ステーション内に、住民の避難場所のほかに次のような施設を整備することを提言する。

1 防災情報ステーションの整備

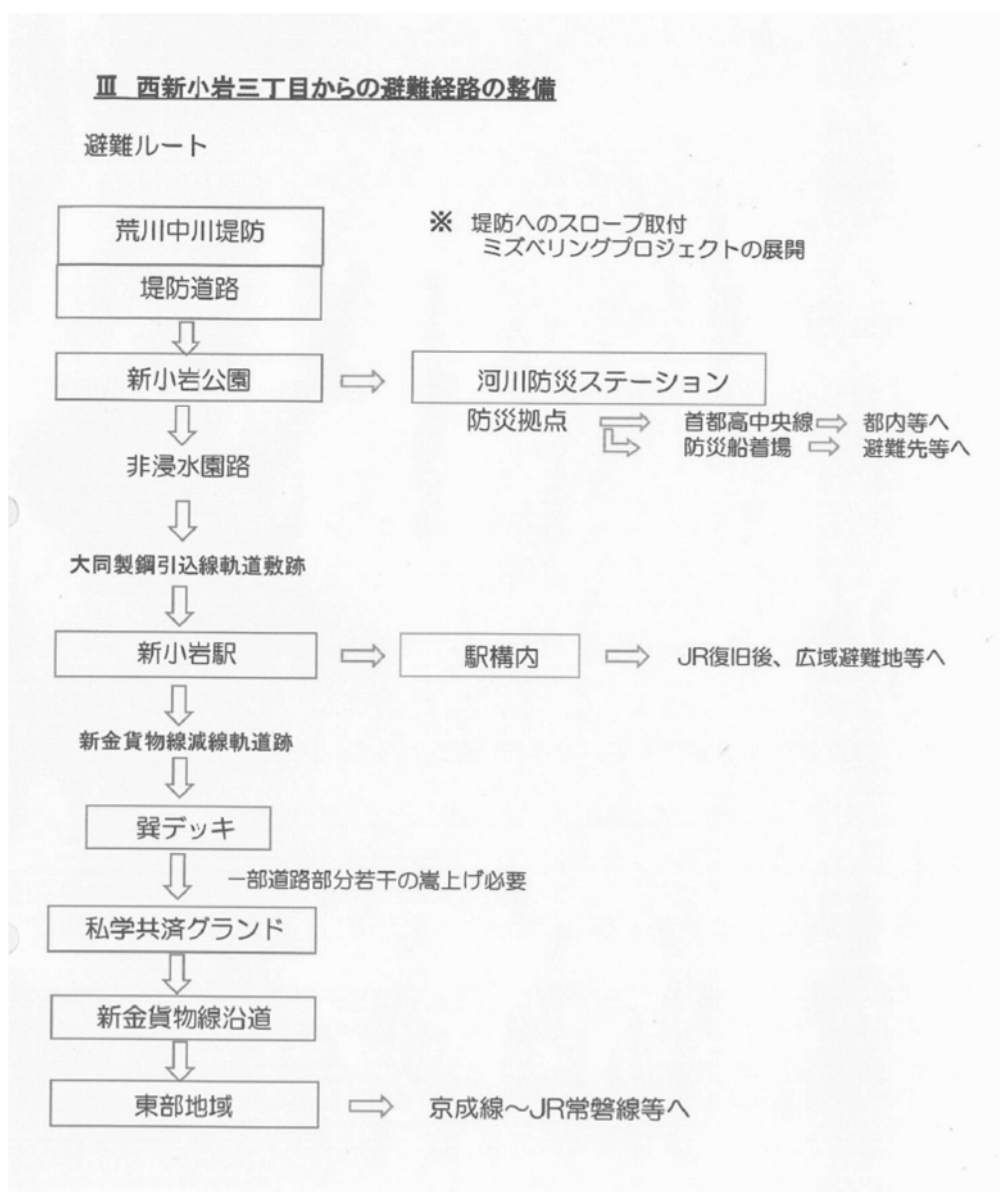
災害時に的確な情報を提供し、行政と双方向の情報交換もできる地域防災ステーションを設置する。

2 水素ステーションの設置

災害時のエネルギーを確保するため、水素ステーションを設置する。防災ステーションの電源とするほか、近隣の公共施設、避難所、病院等へ電気を供給する。

V 関連・付帯する要望

- 1 IIIの避難経路を、高台整備工事期間中も代替路への振替などにより確保する。
 - 2 新小岩北地域公共施設整備事業において、災害弱者に配慮し災害時の一時滞在機能を持たせる。
 - 3 その他の要望
 - ① 中川堤防天端までのスロープ設置 ②間栗公園、間栗ポンプ所跡地の盛土復活
 - ③間栗ポンプ所
- から蔵前橋通りの間に安全な歩行者空間の整備 ④旧中川河道（軟弱地盤）を確認し、堤防の耐震補強の再検討



輪中会議に係る人材・組織の豊かさと可能性について

(認定 NPO)日本都市計画家協会

土肥 英生

平成 28 年 4 月 14 日から始まった熊本県から大分県の広域に渡る、熊本地震では 49 人が亡くなられ、その後の被災生活中でも、多くの尊い命が失われました。全壊・半壊併せ、約 27,000 棟、一部損壊を併せると 10 万棟を超える住宅への被害が発生し、土砂災害なども多発するという大きな災害となりました。犠牲になられた方々に謹んで哀悼の意を表するとともに、被災されたすべての方に心からのお見舞いを申し上げます。

4 月 14 日からの 4 日間で震度 4 を超す地震が 80 回を数え、度重なる地震に対する、建物の耐震力強化の必要性が指摘されています。住民自らが住まいの安全の確保を確保していく、大切さが確認されたと思います。

こうした大きな災害に備える上でも、輪中会議は大きな可能性を持っていると思います。

1. 輪中会議活動の見える化

(NPO)ア！安全快適街づくりのホームページでの情報発信やニュースレターなど、活動報告の発信が豊かなものとなってきています。ホームページ・情報発信に尽力されている方に感謝いたします。

これまで、輪中会議に参加された方は、○新小岩北地区連合町会の各町会・自治会のみなさん、地域住民のみなさん、○保育園、幼稚園、老人福祉施設、○民生児童委員、○消防団、○市民消防隊、○小中学校、○PTA、○小・中・高生、○企業、○本田消防署、○NPO ア！安全・快適街づくり、○行政(葛飾区、東京都、国土交通省)、○専門家(東京大学、芝浦工業大学、日本都市計画家協会)、○学生と、本当に幅広い人材・組織となっています。輪中会議の強みは、係る組織・人材の豊かさにあると思います。

そこで、ここからもう一歩進め、輪中会議に係る様々な組織・個人の防災に係る(防災風味のある)活動が、垣間見られるような、輪中会議活動の見える化(例えば、(NPO)ア！安全快適街づくりと輪中会議に係る様々な組織・個人の各 HP どうしリンクをする、輪中会議として FACEBOOK を開設して、輪中会議に係る様々な組織・個人の活動情報をアップするなど)、を考えてみてはどうでしょうか。

こうした輪中会議活動の見える化を通じて、輪中会議に係る様々な組織・個人の自然発生的な新たな取組みやネットワークが生まれ、地域の防災対応力を高める効果が期待できると思います。

2. 横の連携による、防災プログラムづくり

新小岩公園防災高台整備事業の共同事業の公募が平成 28 年 4 月 1 日よりスタートしています。こうした取組みは、輪中会議で検討・議論してきた成果とも位置づけられると思います。ただ、新小岩公園を防災高台として整備されても、その場所を活用して、地域が地域防災力を向上させる取組みを行わなければ、宝の持ち腐れとなってしまいます。

輪中会議の活動の柱として、防災高台として整備された新小岩公園を活用して、どのような防災まちづくり活動を行うのか、新小岩公園防災高台整備事業が地域の防災力向上の直結する防災プログラムづくりの検討をスタートさせてどうでしょうか。

こうした活動の積み上げを最終的には、この地域の地区防災計画として位置づけことができれば、この地域の持続的な防災まちづくりの仕組みづくりにつなげることが出来ると思います。

オランダの水災害対策の新方針：デルタプログラム

芝浦工業大学 中村 仁

これまで新小岩北地区の活動を牽引していただいた石川理事長、徳倉会長、鈴木会長のご冥福を心よりお祈り申し上げます。私自身は現役世代の身として、これからの活動にさらに貢献していきたいと思います。

今回は、オランダで近年公表された水災害対策の新しい方針を紹介します。

国土の4分の1が海拔0m以下であるオランダでは、気候変動の将来的な影響も考慮して、2011年から毎年、水害リスク管理と淡水供給を目的とした「デルタプログラム」という水災害対策の新しい基本方針が公表されています。特に「デルタプログラム 2014」において、オランダ政府は、水害リスク管理に関して以下の3つの目標を明確にしました。

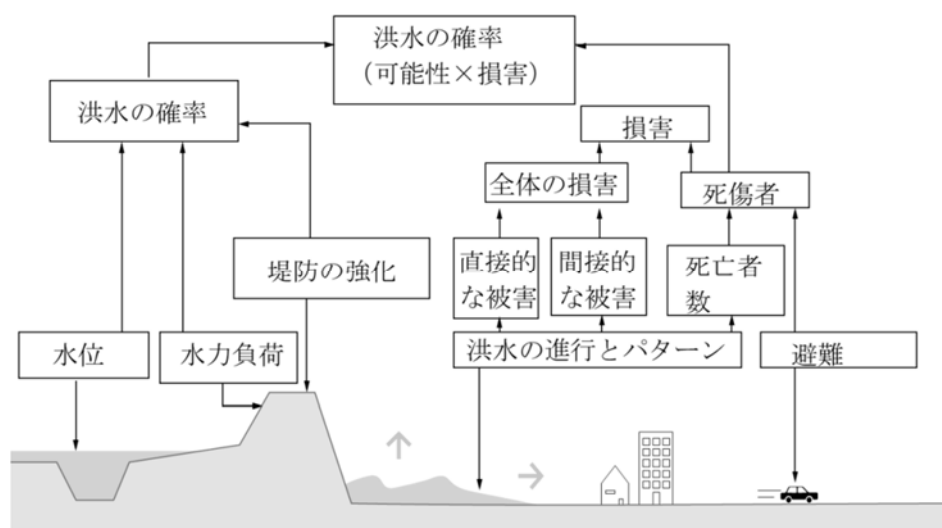
- ① リスクベースのアプローチの手法を用いて（下図参照）、デルタ地域に住む住民が洪水で死亡する確率を10万分の1以下にする。
- ② 経済的な損害や人的被害を軽減し、社会的な混乱を避ける。
- ③ 公共施設や病院のような重要な施設や脆弱な場所の損壊を防ぐ。

また、これら3つの目標を達成するために、以下の対策が重要であると指摘しています。

- (a) 洪水の発生確率を軽減するための予防的な対策
- (b) 洪水の被害を軽減するための空間的な配置
- (c) 洪水の被害を軽減するための災害管理

オランダは、これら3つの対策を組み合わせ、2050年までに、洪水で人命が失われる確率を、10万分の1以下にする目標を立てたのです。「10万分の1」というのは、飛行機事故で死亡する確率に匹敵し、社会的に受容可能な水準にまで安全にすることを意味します。

このオランダの新方針から、日本は何を学ぶべきでしょうか。それを考えたいと思います。



オランダのデルタプログラムにおけるリスクベースのアプローチ

（出典：Delta Programme 2014 をもとに作成）

ロンドン、ダブリン水辺紀行

NPO事務局

山上 忠

昨年11月3週間程イギリスとアイルランドの田舎に「ぶらりスケッチひとり旅」に出掛けました。

＜自然災害について＞ニカ国共地震とハリケーンについては過去殆ど無縁で高い山も無く(イングランドの最高峰は900m、アイルランド1000mスコットランド1300m)、災害日本には羨ましい地形です。旅行中天気は概ね順調でしたが、季節柄突然空が暗くなり突風や冷たい雨に急変します。でも雨は短時間で上がり、そして陽が差す瞬間目の前の晩秋の景色は黄金色に輝きます。濃い影の樹々、庭園、石垣と小川に囲まれた古い屋敷はまさしくターナーの世界です。

不思議なのは都会でも田舎でも傘をさすのは少数派で老若男女が雨に濡れて平気で歩いている事です。額に滴をた



文豪ジョイス会えると期待してオコンネルストリートへ。居たのは像に腰掛けるダブリン娘、なかなか美人、待ち合わせ中で市内に住んでいるという。作家を知っているか聞くと勿論知っているが読んだことはない、と。了解を取って写真とスケッチ。

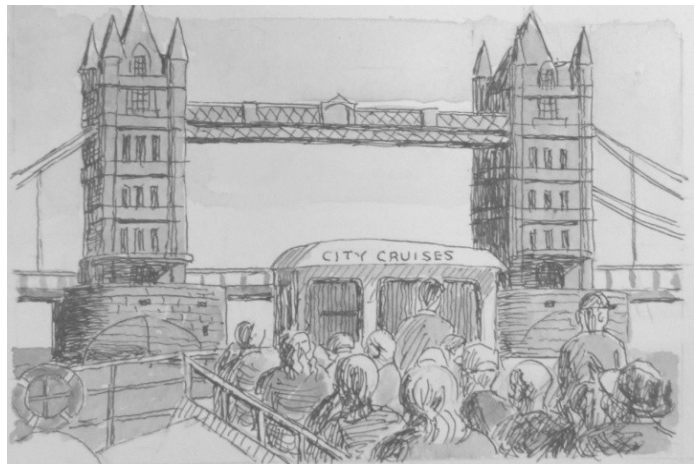
しましたので災害やテロが発生すると情報を旅先まで知らせてくれる事になっていました。災害日本で今やスマホやタブレットなどは「天サイ！まなぶくん」などアプリ満載した欠かせないツールとなっています

らしながら(無理して)平気を装っている様子は、子供の頃愛読した伝記小説の過酷な自然の中の男達リ

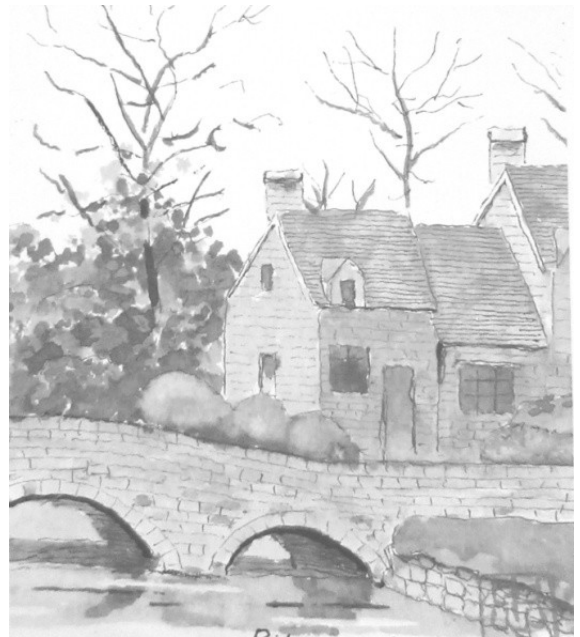
ビングストン、スコット、ロレンス、ヒラリーなどと重なり、ユーモラスながら彼らの意地を見る気がします。

＜スマホについて＞出発2週間前購入し、何とか使いこなそうと孫に色々聞きながら悪戦苦闘の特訓に取り組みました。実際はホテルや鉄道・バス・フェリーの予約を始めGPSナビなど多様なアプリを使って即座に情報が入手出来、旅の段取りが一変しました。翻訳機能も便利で、頑固に自国語を守っているウエールズやアイルランドでは食事時彼らの言語で話しかけると

会話が盛り上がり、酒に料理に愉快なひと味が加わります。また、出発前に外務省に登録



水辺①ロンドンテムズ河 ヒースローに着陸の前、低空の窓から河の両側に見下ろしたランドマークを、今度は水辺の景色としてクルーズ船からゆったりと見上げる。平日でもおのぼりさんで満員。



イングランド南中部バイブリーの民家 ガイドブックにイングランド屈指の美しさを誇るカントリーサイドとある。たっぷり時間をかけてスケッチを重ねる。静寂の中白鳥が泳ぎ集落全てが美術品。ほのかな花の香り。

が、今後更に防災対応機能が進化し拡大される事でしょう。

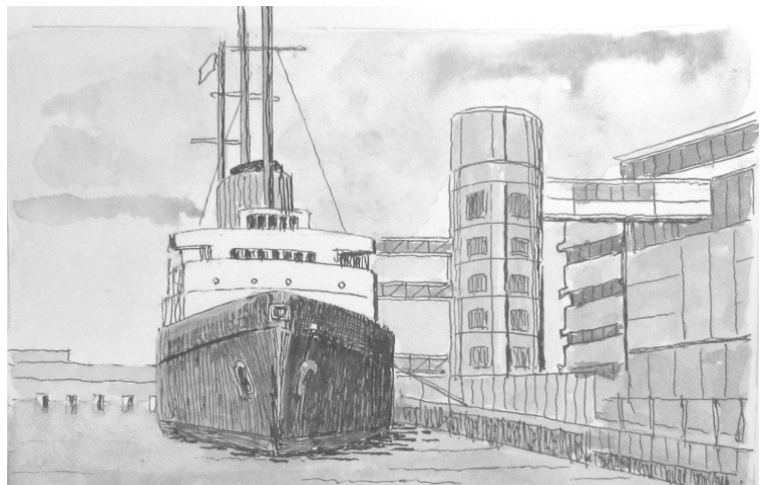
＜水辺ルネサンス＞七つの海に冠たる海洋王国ですので水辺の主役は様々な時代に活躍した船でした。スケッチ 水辺①～④をご覧ください。葛飾七曲りにもゴムボートやアルミボートに加えて田舟、ちよき舟、北前船などの和船をデビューさせたら面白そうと想像しました。

＜グルメについて＞

一位 ウェールズ カナーヴォン レストランの家庭料理「3段チキンクリームパイ+地ワイン」、二位 ダブリンの酒場の「アイリッシュウイスキーJAMESON(大ぶりで重たい冷やしたロックグラスの底に7mmほど)+アイリッシュシチュー」、以下多数あり、イギリスにも美味しいものが沢山あるという感想です。



水辺②リバプール マージ川 奴隷博物館の前に係留された帆船。奴隷貿易廃止令の後に建造されたものだが、髑髏の旗を掲げ、悲惨な歴史を彷彿させる。ビートルズファンで賑わうマシューストリートから歩いて10分、弾んでいた心が歴史の事実にあきれる。



水辺③エジンバラ リース港 プリタニア号 王室ヨットと呼ばれ、5700t、乗員270名の大型船。女王を乗せて世界中を親善訪問した。97年に引退して氷川丸のように固定され大型ショッピングモールから渡り廊下で船内と直結、女王陛下のベッドルームも見学できる(らしい)



水辺④ダブリン リフィ川 ジャガイモ飢饉(1845年 100万人が死亡)時、救済するため被災民をアメリカへ運んだ。ケネディ家の祖先もこの時期に移住している。

＜おわりに＞ 滞在中パリのテロが発生しテレビは連日ニュースで騒がしく グラスゴーからベルファストへのフェリー乗り場では絵具箱の消しゴムまで徹底的にチェックを受けました。次の旅はエジプト再訪を企画中ですが、治安の悪化で「ひとり旅」については家内の了解が得られていません。

第9回輪中会議 “地域の財産のこれからの発展”

横浜市道路局 色田彩恵（元東大加藤孝明研究室）

今回の輪中会議（第9回）では、高台化（新小岩公園高台化整備事業）や河川防災ステーションの実現に向けた動きが、大きな話題となりました。西新小岩三丁目町会の皆さんを中心とした勉強会の成果から、皆さんの熱意、真剣さが伝わってきました。出席者の皆さんの反応からも、高台化や暮らしやすい街路整備（堤防沿い）への期待の大きさや意識の盛り上がりを感じられました。

一方で、忘れてはならない新小岩地域の重要な財産だと私が思うのは、これまで皆さんが積み上げてきた、手作りの地域活動や、多様なコミュニティの輪、地域の課題に対する気づきの共有です。今回の輪中会議では、東新小岩七丁目町会の、実践的な災害対応訓練の経験、また上小松町会の、中学生と協力した防災訓練の運営などについても紹介されました。新小岩地域から普段は離れている私も、皆さんのお話から、すごい！という感動と刺激をいただきました。

大きなハード整備が動き出した新小岩ですが、こうしたご近所密着型の活動や、「親水」など皆で楽しむ活動も、様々な層の住民や多様な団体を輪の中に入れて来やすくし、地域の力をつくってきたのではないかと、改めて思いました。

ここで、横浜市の大岡川での「親水」の事例をご紹介します。桜木町・みなとみらいに注ぐ大岡川の河口付近では、子供たちが、大人に付き添われて、手漕ぎボートに乗る姿が見られ、元気のよい掛け声が聞こえてきます。また最近では、SUP（サップ）と呼ばれる、大きなサーフボードのようなものの上に立って漕ぐスポーツを楽しむ人々が現れています。春には、大きなSUPを浮かべ、桜を見ながら本格的な茶道をたしなむ水上茶会も催されています。

新小岩地域でも、大人たちがゴムのモーターボートで操船訓練（俺たちの朝旅）を行うなど、面白い取組をされています。こうした多様な地域の「親水」の取組を、情報交換できる場があると、活動のさらなる広がりや、他の地域とのネットワーク作りにもつながるかもしれません。



大岡川でボートを漕ぐ子供たち



SUP で水上茶会 (<http://mizube.so/>)

中川七曲りの親水を考よう！ ～アムステルダム親水空間の紹介～

東京大学加藤孝明研究室
NPO ア！安全・快適街づくり
塩崎由人

2012年度から毎年、新小岩北地区の小学校で高学年の生徒たちを対象に出前授業をする機会をいただいている。出前授業では、この地域が水害の危険性を抱えている地域ではあるが、水に親しむことのできる素晴らしい街になれる可能性も持っていることを伝えるようにしている。小学生たちには、諸外国の親水空間の写真と中川七曲りの写真を見比べてもらいながら、この地域で水に親しむ方法を考えてもらっている。ここでは、出前授業の中で小学生たちに一番人気のあるオランダ・アムステルダムの親水空間の写真を紹介したいと思う。ちなみにこの写真は、私が数年前にアムステルダムを訪問した際に撮ったものである。

一つ目の写真（左）は、住宅街の中の運河にかかる人道橋である。この橋は、真っ赤な色にくねくねとした構造のデザインで、街の中でもとびきり目立っていた。そして、さらに面白いのは、この橋の欄干から近所の子供たちが運河に飛び込んで遊んでいたことである。二つ目の写真（右）は、運河に浮かぶヨットである。ただのヨットの写真に見えるかもしれないが、ヨットに乗っているのはすべて小学生くらいの子供たちである。もちろん大人の監視員がそばで見守っているのだが、アムステルダムの子供たちは上手にヨットを操りながら運河の水面を行き来していた。オランダ・アムステルダムもゼロメートル地帯に位置するために水害の危険性を抱えているが、同時に水辺を街の中にうまく取り込み、日常的に水と親しんでいる印象を受けた。水の脅威に備えながらも、水の恵みも享受しているのである。

出前授業でこの写真を見せると、小学生たちからはきまって「自分たちもこんなことをやりたい!」、「中川でも何かできるんじゃないの?」という声上がる。さて、ここで一度、本ニュースレターの表紙の写真を見てほしい。これらの写真はすべて中川七曲りのものだ。この写真を見ていると、ちょっとした工夫で、中川七曲りもよりいっそう素晴らしい親水空間になりそうな気がしてこないだろうか？新小岩北地区の小学生たちの期待に応えるためにも、楽しく活動を継続するためにも、浸水に備える取り組みに加えて、親水を生み出す取り組みもしていきたいと思っている。



水辺から生まれる都市の魅力：漢江(ハンガン)協力計画と

ビジョンづくりによる都市空間づくり

東京大学生産技術研究所地域安全システム学(加藤孝明研究室)

金裁潑 特任研究員

世界の大きな都市は、ほぼ川が流れている所に都市が形成された。川は人に豊かな環境を提供することもあるが、洪水などの災害によって生命を脅威するなど、人間の暮らしに大きな影響を与えて、様々な挑戦を要求してきた。それで、川には我々の人生の姿が描かれていて、川をどのように抑え、守り、利用したのかを見ることができる。

各都市の河川管理パラダイムの変化は時代の要求に応じて変化してきた。最近の都市河川管理パラダイムは洪水管理、自然性の回復、都市開発と再生、観光を通じた経済活力の増進など複合的目的を同時に追求することである。

また、都市河川の場合は都市内部を流れている河川の特長上、河川管理の側面から治水を中心にした伝統的なパラダイムから次第に市民たちの活動空間として河川や水辺の活用や生態河川復元に、管理方向が拡大されてきており、これとともに、経済的側面で都市再生と観光などを考慮して複合的な水辺の開発が行われている。

このように、河川利用のパラダイムが多機能複合利用という変化に伴い、川が流れている世界的に有名な都市は「ロンドンのミレニアムプロジェクト」、「スイスアートバーゼル」、「韓国の漢江協力計画 2015」などの計画を統合的観点から段階的に推進してきており、代表的な観光名所を造成して数多くの観光客の足をひきつけている。

漢江は韓国の経済開発の過程と脈を一緒にしながら、多くの計画と開発が行われてきた。

1925 年に発生した洪水は治水対策を原点から再び考えるようになった。1925 年の洪水は韓国の洪水歴史上その類例を見ないほどの大洪水だった。最大流量は漢江人道橋(現、漢江大橋)で秒あたり約 3 万 3 千トン、水位 11.69m で、ソウルのほとんどすべての河川堤防が崩壊し、氾濫面積が約 585.13 km²(現在、ソウル面積 605.28 km²の 97%程度)に達したと伝えられている。その結果、漢江の改修作業に拍車をかけることになった。

1960 年代の漢江は梅雨に洪水が多く、ソウルの一部低地帯は毎年浸水が発生した。また、急速な産業化で、河川流域総合開発の概念が普及し、江辺道路、コンクリート護岸の設置、無分別な骨材採取、災害危険性の増加などの現象が現れ始め、過去の親水文化空間が次第に消えることになった。(ソウル環境運動連合、大韓河川学会 2010)

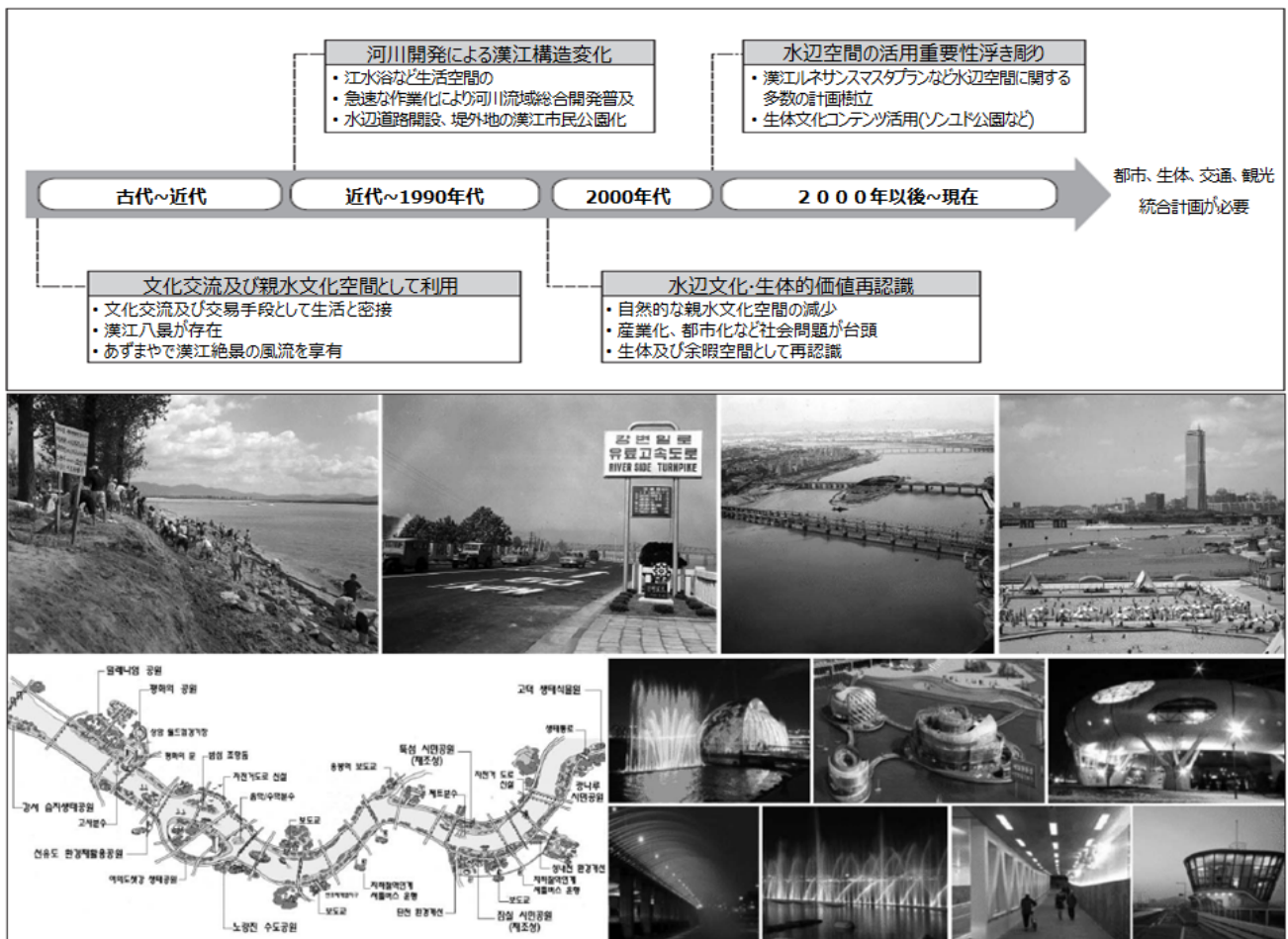
漢江の本格的な変化は 1980 年代に推進された漢江総合開発事業を通じて行われた。数量確保のための水中堰などの治水機能の拡大、水質汚染防止に向けた下水管路、下水処理場の建設、オリンピック道路の建設及び江辺道路拡張、水辺公園の造成を通じた休息空間確保、遊覧船や水上レジャ

一・スポーツ施設など現在漢江の基本骨格を形成した。その後、水資源長期総合計画、流域総合治水計画、河川基本計画などが樹立・施行され、長期的な国家計画として、水資源確保と治水という目標を達成しようとした。また、ソウルの産業化と都市化過程の弊害が社会問題となって、水辺空間での暮らしの質ということに対して関心が高まり、水辺空間の文化的・生態的な価値について、再び認識するようになった。（ユンジンヨン 2009）

2000 年代以降には親水空間に対する市民の要求が拡大し、水辺空間活用に対する重要性が高くなった。この時期に市民たちは、漢江を新たな余暇空間として認識して、文化的機能と活用に関して、高い関心を持つようになった。（文化体育観光部 2011）

一方、このような時代的潮流の中、ソウル市としてもソウル市区間の漢江に対し、水辺空間活用、川沿いの土地利用の改善や漢江の自然性回復を集中的に模索しており、2007 年、漢江ルネッサンス計画を通じては、漢江の視覚的ランドマークや利用拠点の造成事業、特化公園造成事業などを施行した。また、2014 年漢江自然性回復基本計画、2015 年漢江管理基本計画など水辺空間活用のために多様な計画を樹立し推進してきた。（ソウル市 2015）

韓国の都市河川管理のパラダイム変化を見せる漢江の変化過程



しかし、このような各計画の大半は、ソウル市民だけを対象とした計画であり、かつ個別施設中心に進められてきたことが事実だ。 実際、漢江ルネッサンス事業以降には、漢江の水辺空間に個別的に施設として、トゥクソム展望文化コンプレックス(シャクトリムシ)、セビッソム、漢江展望カフェなど一部の文化施設が造成され、今まで運営されている。

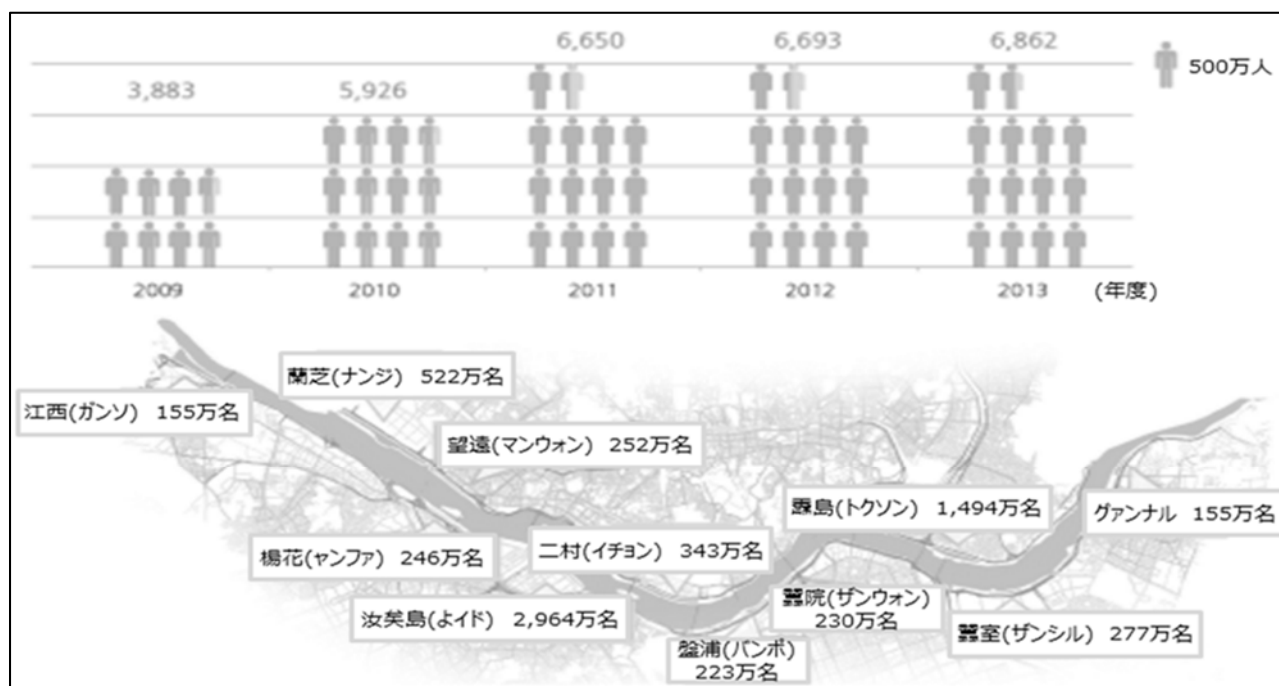
社会が複雑になってきて、他分野の最近計画の傾向は統合的な観点から試みられているが、現在まで漢江と関連された計画は、都市、生態、交通、観光などがすべて考慮された統合的なレベルに及ぼしてできない。 したがって、新しい時代を迎え、単一の機能からの観点から離れ、漢江を多機能複合用途として活用する統合的な水辺空間計画が必要である。

このように、中央政府およびソウル市では、多くの計画と事業が推進されてきたが、まだ解決されていない問題が残っていることが指摘されている。 都市河川としての生態的自然性は依然として不十分で、接近性も都市と水辺空間が江辺道路によって断絶されている状態だ。 水上レジャー・スポーツの活動など、漢江での活動多様性も不足しており、川沿いの土地利用も住居用途が多く、画一化され、漢江景観の私有化及び公共性不十分も主要な問題と認識されている。

さらに、漢江は 2012 年ソウル市民に対するアンケート調査で、ソウルのランドマーク(1 位の漢江、37.9%、2 位の南山(ナムサン、35.7%)の順)で最も先に挙げるほど、代表的な象徴空間として認知されており(アイディインキュ 2012)、ソウル市統計では、2013 年 1 年間の漢江市民公園の利用者数が 6,862 万人、ソウル市民 1 当たりの年間平均利用回数は 6.6 回である。

このように漢江はソウルを超え、韓国の代表的なランドマークであり、ソウル市民が愛用する都市空間であることにもかかわらず、漢江が持つ世界的なブランドに比べてその潜在力がまだ十分に活用されていないという指摘も提起されている。

年度別、公園別、1 年間の漢江市民公園利用者数(資料：ソウル市漢江事業本部漢江公園利用者数)



こうした漢江の問題意識と自然性回復と観光資源化という時代的な問題意識に共感して、中央政府とソウル市は共同で対応することにした。1年間の準備、調整、意見清聴などを経て、これを実現するための「漢江協力計画(2015)」を樹立した。

ソウル市の自然性回復基本計画を国土交通部の河川基本計画と連携・反映するようにして、中央政府とソウル市の漢江関連計画が緊密に整合性を持つようにした。推進体系も、今後の協力計画推進過程で発生する問題などを解消するため、協力体系を持続することにした。

漢江協力計画のビジョンは「開かれた漢江、希望の漢江」に決めた。漢江は誰でもどこでも接近しやすい空間がなければならない、川の未来価値増大を通じて国民に希望を与える空間にならないといけないという方向が盛り込まれている。このようなビジョン下に三つの目標として、自然性回復、漢江-都市連携の増進、魅力的な空間の創出を設定した。

漢江はソウル市区間だけでも41.5kmに達する広大な地域であるため、漢江協力計画では、ソウル市漢江区間を7つの圏域に区分して特化された発展方向を樹立した。7つの圏域は、水辺中心の活動圏や地域別資源分布の特性及び都市空間構造などを考慮して設定した。

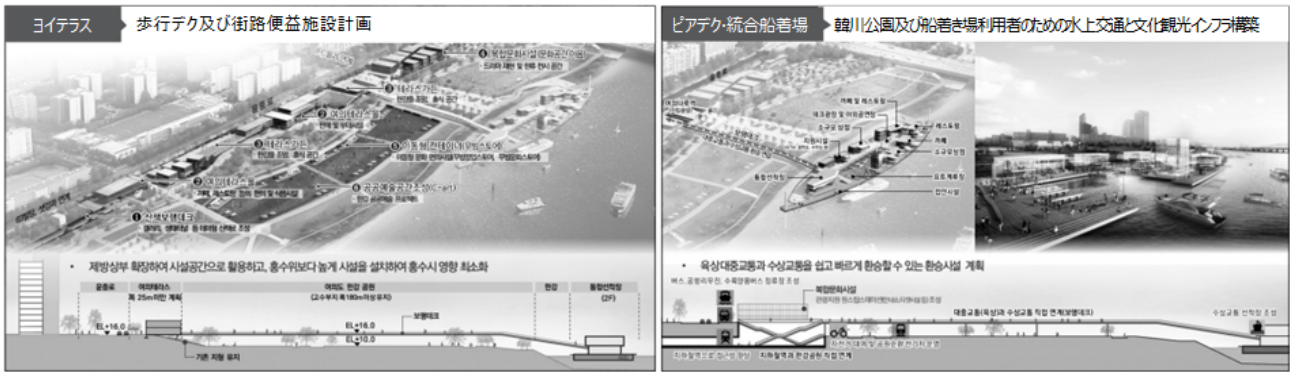
漢江協力計画の7個 圏域別 発展方向(資料:ソウル市)



7つの圏域のうち、ソウル市都市空間構造、汝矣島(ヨイド)地区の良好な接近性と流動人口、バムソム・如意枝川など豊かな生態資源、ソウル都市基本計画など、従来の計画との連携可能性などを総合的に考慮して「如意(ヨイ)-二村(イチョン)圏域」を優先・協力の拠点に選定した。

水辺空間を活用して見る・食べる・楽しむことが豊富な魅力的な空間に創出するため、ピアデッキ(埠頭型水上デッキ)、如意テラス(ユンジュン路沿い)、ムービングストア(移動型コンテナ)などを設置して多様な文化・便利施設などを造成する。そして、市民が企画・公募・選定過程に参加するテーマ別の公共芸術品も設置する。また、大衆文化および韓流コンテンツと関連された展示空間や映像・音楽創作空間などを備えた複合文化施設(仮称文化空間つなぎ)も造成される。

汝矣(ヨイ)自然性回復、汝矣(ヨイ)水辺文化地区計画(資料:ソウル市)



このように漢江を中心としたソウル市は社会・経済的な環境変化に従って、革新を通じる新たな方向性を模索して、川とともにした都市空間を作るための努力を始めた。

“A city is not gauged by its length and width, but by the broadness of its vision and the height of its dreams.”

“都市はその長さや幅という空間的な大きさによって測定できるのではなく、都市が抱いたそのビジョンの幅と夢の高さによって測定される。”

この言葉はカリフォルニア州サンフランシスコで市民の人生に関する話を新聞のコラムに書いたサンフランシスコの良心の声(Voice and conscience)と呼ばれた Herb Caen が言った言葉だ。彼が指摘したように、我々の都市歴史は都市のビジョンと夢ではなく巨大な都市、またその規模を大きくすることに集中したのかもしれない。

都市の規模を大きくすることだけに集中して、現在のほとんどの都市は各種問題に直面している。特に、気候変化などにより増加する災害は都市の未来が不確実性に抜けるようにして、私たちに持続可能性に対する懐疑心を抱かせる。

ソウルの場合も変わらない。直面した問題を解決するためのことに集中してきた。目に見えることに努力に集中して、さらに遠くまで見る目がなかったのかもしれない。

しかし、最近に漢江の役割が再び描かれている。文化と観光を中心にする新たな挑戦だ。2015 漢江協力計画に通じて、韓国政府とソウル市の連携、漢江周辺地域のコミュニティとの共感の形成、均衡的協力、自発的な参加を基に事業が推進され、ソウル市が文化的な格があるし、観光活性化による経済活動の中心地に生まれ変わって、韓国人だけが愛される空間ではなくて、外国人たちからも愛される空間になってほしい。

世代を超えた“学びの場”としての地域の活用に向けて

東京大学工学系研究科都市工学専攻 修士課程 2 年
生産技術研究所 加藤孝明研究室 南 貴久

2014 年の第 7 回輪中会議に初めて参加させて頂いてから、1 年半が経ちました。その間、輪中会議をはじめ、避難所運営訓練や NPO の小中学校での活動等に参加させていただくなかで、地域の皆様の活動には私自身、非常に刺激を受けております。

昨年度は、上平井小学校での出前授業の講師をさせていただきました。児童の皆さんが、私が思っていた以上に、地域のことや災害のことに関心や知識を持っていることに驚きました。また、自然には、災害などの怖い面がある一方で、普段はうまく生かせば楽しいまちにすることができるというお話をしたところ、子供たちが自ら色々な想像力を働かせてくれたのが印象的でした。



出前授業の様子（12 月 10 日（木） 上平井小学校にて）

こういった地域の未来を担う子供たちに向けた活動は、たいへん意義のあるものだと思います。しかし、これを単に教室の中で閉じた 1 つの授業、あるいは楽しい 1 イベントで終わらせてしまってはもったいないという思いもあります。そこで本稿では、私のこれまでの拙い経験や見聞を元に、今後の活動の方向性について提案をさせていただきたいと思います。

私は、大学の学部 1 年生の時から、子供たちや地域の方たちに、科学の面白さを伝える活動に携わっています。具体的には、小学校や科学館・公民館等に出向いての出張科学実験教室や、イベント会場でのサイエンスショー（テレビでお馴染みの米村でんじろう先生のパフォーマンスを思い浮かべていただくと良いかと思います。）をはじめとして、最近では「科学実験バスツアー」などの新たな試みも行っています。こうした、科学に普段なじみのない方に分かりやすく伝える活動は、「科学コミュニケーション」と呼ばれています。

最近では、この科学コミュニケーションと地域のまちづくりを結びつけようという取り組みにも関わっています。たとえば、東京大学柏キャンパスの学生が中心となって活動している「柏の葉サイエンスエデュケーションラボ（KSEL）」では、「街まるごと科学館 Exedra」という企画を行っています。これは、街全体を科学館に見立て、科学に関する様々な展示をあちこちで行うというものです。KSEL ではこの企画と並行して、街の人が気軽に研究活動を行う場づくりや、小学生向けの体験旅行などの催しも行っており、街の人たちが研究したり学んだりした成果を、街の人に向けて展示する、といったことができないかと模索しているところで

す。

また、防災に関するものとしては、宮城県の亘理町で行われている「防災キャンプ」にも関わっています。これは、小学生向けの、小学校を会場として実施するキャンプです。体育館を使用して避難所での食事や就寝を体験するほか、地元の高校の先生や消防士、防災士、野外研修施設の職員などの方々が講師となって、災害に関するさまざまな体験や知識を得ることができるプログラムが用意されています。さらに、今年度は10月に行われる地域の祭のなかで、大人たちに向けてその成果を発表する機会を作れないかと考えています。

これらの事例から、私が新小岩北地区にも適用できると考えているのは、次の2点です。まず第一に、地域を「学びの場」として使う、という視点です。地域には、様々な知識や経験を持つ方々がたくさんいらっしゃいます。その方々に講師になっていただくことで、子供たちがより地域に密着した学びを行うことができるようになると思います。特に防災においては、地域のことをよく知ることが何よりも重要なので、その地域のことをよく知る大人が直接伝えることで得る効果は大きいと思います。

そして第二に、得た知を発信する場を作るという点です。せっかく学んだことも、授業の1コマの中で完結してしまっただけでは、定着することなく忘れられてしまう可能性が高くなります。そこで、学びの場で得た知を使って自ら考え、発信する機会をつくることが重要になります。例えば小学校の防災学習では、授業で知ったことに基づいて身の回りの危険なところについて自分で調べ、その危険について家族と話して、もう一度教室に持ち寄って発表する、といった活動が想定されます。このようにすることで、授業で学んだ知識を実際に使える知恵として定着させるだけでなく、その効果を家族の大人たちに波及させることもできると思います。

さて、ここまでで述べたことは、子供の学習だけでなく、大人の学びについても同様なことが言えると思います。地域には、様々な“場”や“資源”があります。そして、様々な背景、つまり知識や経験をもつ方々がいらっしゃいます。これらを組み合わせ、交流させることにより、個人の生活をより豊かにするだけでなく、地域の交流を活発にすることもできるのではないのでしょうか。また、知の発信の観点からは、啓発イベントや避難訓練などの催しについても、単発の催しで終わらせてしまうよりも、その後の活動へ結び付けるための工夫や、成果発表の場を設けるなどの“もう一押し”を行うことにより、得られる効果の継続性を高められると思います。

実際、新小岩北地区の活動でも、こうした地域全体を学びの場として生かす素地は十分にできていると感じています。たとえば、中学校の地域防災研究部の皆さんは、毎年研究の成果を発表する機会を持っているとお聞きしています。こうした活動を、より地域の方々に開き、それぞれが影響しあって議論や関心を深めていくことで、それぞれが学んだ知識、得た経験などを、地域の知として持続的・発展的なものに昇華させていくことが可能となると感じています。NPO や町会などの大人の活動も含めて、地域全体で持続的な学びの場を形成し、地域を楽しい場所にしていくことができるよう、私も微力ではありますが、この地域の活動に関わらせていただければと思っています。

水防災意識社会を再構築する取り組みと 荒川水系河川整備計画の策定について

国土交通省関東地方整備局
荒川下流河川事務所長
中須賀 淳

昨年9月の関東・東北豪雨では、利根川水系鬼怒川等の19河川において堤防が決壊し、67河川で氾濫等の被害が発生しました。特に鬼怒川流域では、常総市三坂町で鬼怒川左岸の延長約200mにわたる堤防決壊により多くの家屋が倒壊・流失し、越水や堤防決壊等により常総市の約1/3の面積に相当する約40km²が浸水し、住家被害が約6,500棟にのぼる甚大な被害が生じました。幸い、荒川では大きな被害の発生はありませんでしたが、荒川においても同様の氾濫被害が発生する可能性はあるのか、氾濫した場合はどんな被害となるのかなど、連日マスコミ報道がなされました。

国土交通省では、この豪雨を踏まえて、水防災意識社会を再構築する取り組みを行うこととしており、ハード対策の着実な推進に加えて、水害リスクの高い地域を中心に、住民が自らリスクを察知し主体的に避難できるよう「住民目線のソフト対策」に重点的に取り組むこととしています。例えば、家屋倒壊危険区域の公表やハザードマップの改良、これまで北区、足立区、葛飾区で試行的に行ってきたタイムラインの沿川市区への拡大などを行うことを予定しています。これら「住民目線のソフト対策」については、お住まいになる皆様のご理解・ご協力があつてこそ進められるものと思っております。

当事務所では、特定非営利法人ア！安全・快適街づくりをはじめとする地域の方々と一緒に防災・減災について考え、安全・安心で快適な地域の実現に向けて協働で進めて参りたいと考えています。

さて、関東地方整備局では、戦後最大洪水である昭和22年9月のカスリーン台風による洪水と同規模の洪水が発生しても災害の発生の防止を図ることを目標とした荒川水系河川整備計画を平成28年3月18日に策定したところです。本計画では、荒川において今後30年間で実施する事項として、洪水を安全に流下させる対策、高潮対策、超過洪水対策、内水対策、地震・津波遡上対策、危機管理対策等を進めていくこととしております。

葛飾区内においては、洪水を安全に流下させる対策として、京成本線荒川橋梁の架替えや河道掘削、高潮対策として高潮堤防（中堤）の整備、地震・津波遡上対策として、水門の耐震などを順次実施することとしておりますので、ご支援のほどよろしく申し上げます。

荒川における水辺利用とミズベリング（MIZBERING）について

国土交通省関東地方整備局

荒川下流河川事務所沿川再開発課長 内田 剛二

●荒川における水辺利用について

荒川では、これまでに江戸川区、北区、川口市の3カ所で「水辺の楽校」を整備し、地域の学校や市民団体、市区、国土交通省が力を合わせて、水遊び、学習を支える地域体制を構築し、荒川の水辺を活用した自然観察や水質調査等の水辺体験活動を行っております。



（魚取りの様子）



（水質調査の様子）

●ミズベリングについて

国土交通省では、かつての賑わいを失ってしまった日本の水辺の新しい活用の可能性を創造していく企画として、「ミズベリング・プロジェクト」を進めております。水辺に興味を持つ市民や企業、そして行政が三位一体となって、水辺とまちが一体となった美しい景観と、新しい賑わいを生み出すムーブメントを起こすことを目的に国土交通省では、「河川敷地占用許可準則の緩和」や「全国の水辺自慢写真」、「夏の水辺楽しみスポット情報」の募集・公表などの取り組みを行っております（ミズベリング：<http://mizbering.jp/>）



当事務所においては、「ミズベリング・プロジェクト」の一貫として、昨年度に荒川ロックゲート周辺で「防災の第一歩は水辺に集い親しむことから」をテーマとしたイベント「荒川ロックゲートフェス」や「いつおこるかわからない災害に備え、日常では訪れる人の少ない夜の荒川を地域の方に体験してもらうためのイベント「荒川ライトアップ」を開催するなど、荒川の水辺の新しい活用の仕方を発見、そして、荒川の賑わいとなるきっかけとなるような取り組みを進めております。



（荒川ロックゲートフェス）



（イベント時の水辺の利用状況）

区の水害への取り組みについて

葛飾区役所 地域振興部 防災課長 情野正彦
防災課 笠倉英司（計画係長）
防災課 大田聖家（担当）
都市整備部 調整課長 関口薫
調整課 尾澤武（事業調整担当係長）

はじめに

石川理事長や徳倉副理事長、西新小岩三丁目町会の鈴木会長のご逝去の報を受け、心よりお悔やみを申し上げますとともに、謹んでご冥福をお祈り致します。

新小岩公園の高台化事業が始まろうとして、今後ますます新小岩地域での水害への取り組みの重要性が増すなかで、これまで地域での活動の最前線でご活躍をされてきた御三人方の訃報を受け、残念でなりません。

今後は御三人方の想いを心に留めて、新小岩地域や NPO の皆さまとともに、新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会での活動に取り組んでまいりたいと思います。

区の水害への取り組みについて

水害時の広域避難の取り組みを推進するため、近隣自治体との協定の締結を進めるとともに、避難の仕組みづくりを今まで都へ要望してまいりました。昨年度は、東部低地帯の江東5区が「江東5区大規模水害対策協議会」を立ち上げ、連携して大規模水害時の広域避難について検討を始めました。

また、区独自の施策として、大規模水害時に浸水しない地域への避難が間に合わなかった方々が、生命を守るために緊急的に利用をする施設を「洪水緊急避難建物」に指定し、簡易トイレとアルミブランケットを配備しました。さらに自助・共助の取り組みとして、自治町会とマンション理事会が水害時の一時避難に関する協定の締結を推進することを目的に、「水害時における民間集合住宅との一時避難協定の締結に係るガイドライン」を策定し、自治町会に周知しているところであります。

また、救助や物資搬送に活用するため船外機付きのゴムボートを購入し、本田消防団に4艇、金町消防団に2艇貸与しております。

さらに9月の常総市での鬼怒川決壊を受けて、区でも水害時の災害対策本部や水防本部等の配置基準や行動内容について、河川ごとの水位を考慮した見直しを行いました。

今年度は、国が管理する河川の新たな浸水想定区域図が公表される予定となっており、区でも洪水ハザードマップの見直しを検討してまいります。この他にも、氾濫発生時をゼロタイムとして、ここから遡って「いつ」「何を」「誰が」するのかを計画として定めるタイムラインと呼ばれる事前防災行動計画も、策定いたします。

また、引き続き、区民に水害に関する理解を深めてもらうために、地域での講習会の実施や広報かつしか・区公式ホームページを活用した周知活動を行ってまいります。

新小岩公園の防災高台整備事業では、国で新たに創設する東京東部低平地帯「防災高台整備事業」を活用し、公募により共同事業者を決定し、地元区民の悲願である新小岩公園の高台化を行っていきます。

平成 27 年度前期葛飾区地域活動団体助成事業（報告）

「親子で話し合い語り継ぐ大水害時の避難について講演会とパネル展示」活動概要

NPO ア！安全・快適街づくり

増澤一朗

この事業は、平成 23 年発生した「東日本大震災」を教訓に大雨で荒川が決壊した際、「命だけは助かる避難について」の講演会・パネル展示・出前授業等を新小岩北地域に住む方々へ当 NPO が継続して行っています。

対象の方々は子供からお年寄りまで各層に及び、講演会等に参加された方は一様に、「ゼロメートル地帯の怖さ、避難の心掛け、いざという時の逃げ場所など色々なことが分かった。今後とも続けて欲しい。」との声が数多く寄せられています。

殊に地元の各小学校からは、「毎年生徒が変わるので、この事業を続けて行けばいずれは地域の全員が授業を受けることになる。」とも言われました。

平成 27 年度も、「うらら保育園、たつみ保育園」での講演会、「二上小学校、上平井小学校、松上小学校」における特別授業や出前授業そして、上平井中学校地域防災研究部への支援等多岐にわたる活動を行ったところです。

このような地域に根差した地味で息の長い活動の一端を紹介しましょう。

活動例：出前授業

- ・対象学年： 松上小学校第 3 学年
- ・場所： 松上小学校体育館
- ・日時： 平成 28 年 1 月 23 日（土）葛飾教育の日 8：45～9：30
- ・講師： 中川東新小岩七丁目町会長（当 NPO 理事）
塩崎由人（東京大学生産技術研究所加藤孝明研究室）
- ・内容：

大寒の底冷えがする第一時限の体育館は、1 台の大型石油ストーブで 3 年生 94 名を暖めていた。

3 学年主任白木先生が、「皆さん元気よく講師の先生方を迎えましょう。」の掛け声と、中川町会長さん、塩崎さんの自己紹介で、授業は始まった。

中川町会長さんは、「私はこの地で 80 年生き、今ワクチャレのリーダーをしていますが、皆さんはワクチャレって知ってますか。」と、緊張をほぐす質問に大勢の生徒が「知ってます。」と答えた。

続いて、「皆さんの一番怖いものは何ですか。」の質問に、「地震、カミナリ」の声と共に、「竜巻！」と言う答えが上がるや、講師はすかさず、「私が皆さんと同じ頃、ここは鍋やヤカンを作る工場でした。ある日、地域と工場が交流する運動会が開かれ午後に入ると突然西の空に黒い雲の塊が竜巻となって近付いて来るのが見え、舞い上がったドラム缶同士がぶつかる音と、『建物の中に逃げ込め！』の叫び声で、私は目の前のどぶ川を一気に飛び越えたと思った途端、ドボンと落っこちてしまい、周りの人に助けられ、体中泥だらけになって工場内へ逃げ込みました。

後になってどぶ川を見に行くと、川幅が 4.0m ぐらいで落っこちた直ぐ横には橋があり、正気であれば橋を渡り、ましてや飛び越えよう等とはしなかっただろうに。

子供心に何でそうなったかを考えました。

そして ①、頭が真っ白になって、落ち着きを無くした。

②、地面が上がって、川が跳べる幅に見えた。

③、冷静に考えられないで、行動が先に出た。

皆さんも、万が一水が来たとき浅いうちに、逃げようとししないで冷静になって考え、絶対慌てないで行動して下さい。」と結ばれた。

講師の経験談は、生徒にとって明日起きるかも知れない身近な話で、我が身と引き換えられ、皆、一様に興味深げに聞き入っていた。

中川町会長さんの話を引取り塩崎講師は、「落ち着いて行動するには、災害を知って、心の準備をして置くことが大事です。災害にも色々あってここ新小岩は、カスリーン台風で街が水の中となり、「中川町会長さん、何週間水に漬かってましたか？」の質問に、「3週間程屋根や土手の上で生活していました。」と答えると、生徒達は「へっ!」とびっくり声を上げた。

次いで講師は、「ゼロメートル地帯って知ってますか？」との質問に大半の生徒が「知ってます。」と答え、次の質問「地面と川の水面ではどちらが低いですか。」にも殆んどが「地面の方が低いです。」と答えた。

今度は講師が吃驚し、「ではクイズを出します。」と言って、「地面が川より低いのは何故ですか。低いのは、①地震で下がったから、②魚が水を持ち上げたから、③地下水を汲み上げ過ぎたから。」の答えに①と③がほぼ半数、②と1名が答えた。

講師は、「正解は、③です。中川町会長さんは地盤が下がった様子を知る目撃者ですね。」に会長さんは深く頷いた。

続いて、「堤防が切れて水が来たら街はどのくらいの深さになるかを示す、赤い帯が電柱に貼ってあるのを見たことがありますか？」の問いに大勢が「あります。」と答え、更に「赤い線まで水が来ます。」と答える子もあり、授業は自然と水害の話に移っていた。

「水害から身を守り落ち着いて行動するには、情報を集めることです。ここで皆さんにお願いします。家にある『ハザードマップ』と、スマホがあればアプリ『天才まなぶ君』を家族と開いて見て下さい。」と宿題を出しながら、スクリーンに地元が取り組んでいる水害に備える色々な訓練の様子を映し出した。

授業時間も次第に押してきた頃、講師は、「水があるからこそ出来る、水と親しむ世界の街を紹介しましょう。」と、オランダとベルギーで自身が撮影した橋の上から運河に飛び込む少年やヨットを操る子供達の姿、船を横付けする川沿いの家並み、ボートハウス、水に浮く家或いは、セーヌ川をビーチに見立てた風景等次々に珍しい画面が登場した。

生徒達はただ吃驚した様子で引き込まれていたが、やがて講師の「水害の危険がある川も工夫次第で、楽しめる川にする事が出来ます。七曲りのテラスも地域の魅力になると良いですね。」の言葉で我に返り、終了時間となった。

別れ際、生徒達は中川町会長さんと塩崎講師に代わる代わる握手を求め体育館を後にし、本授業を終了した。

以上はほんの一例で、詳細はホームページをご覧ください。

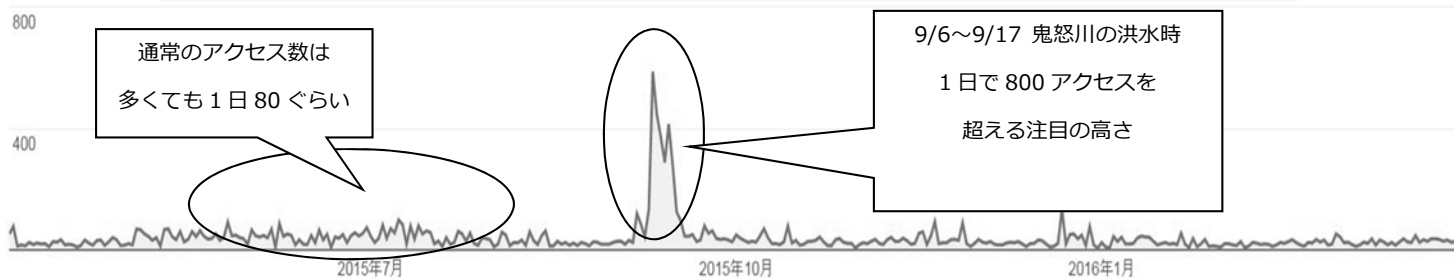
この他にも地元の保育園や小学校での講演会・特別授業或いは地元町会自治会役員による、船からの工事現場視察等盛り沢山且つ多彩な活動を行いました。

また、上平井中学校地域防災研究部員による「学芸発表会」へ向けての調査研究を、当 NPO が大学と共同して毎年支援を続けています。

これからも葛飾区から助成を得て活動出来るよう、現在申請中です。

NPO 会員の古川修です。「NPO ア！安全快適街づくり」のホームページについて、最近の状況含めて運用状況をご報告いたします。

◎本年度の Web ページのアクセス状況について

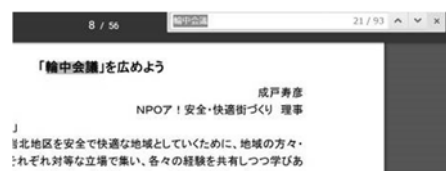


上記グラフは 2015 年 4 月～2016 年 3 月 31 日のアクセス数の推移を示しています。茨城県常総市の鬼怒川の堤防決壊のときには、通常の約 10 倍となるアクセスがありました。見ているページは「東部低地帯とスーパー堤防」で、Google 検索からたどり着いています。度重なる豪雨と堤防決壊のニュースに加え、葛飾も洪水警報が出ており、堤防やゼロメートル地帯に関する情報をたくさんの方が求めています。今までに当 NPO で作成した資料等を Web ページで提供できるようにして、有益な情報を増やしていければと思います。

(Vol.1 から閲覧可能) ニュースレターの PDF について



今まで発行したニュースレターはすべて PDF 化され NPO のホームページにアップロードされています。ページを開けば文字の検索も使えるようになっていますので、是非ご利用ください。



※「輪中会議」で検索した例

(ぜひご覧ください) 出前授業や講演会の記録

当日は前日(11月24日)より寒さが増した分、教室内は大変暖かく生徒達の熱気で、暖かい様子が伺えました。授業と同時に先生のイラストも大活躍と評判になりました。自己紹介後、南講師はプロジェクターを操作しながら「自然災害について説明を始めた。



最初緊張していた生徒も先生の語り掛けと質問に、緊張もはぐれ涙や拍手をし、喜んでいた。例えは「今年の大きな雪は？」、「高層にはどんな川がある？」、「ゼロメートル地帯って聞いたことある？」、「まちと中川水」などではどちらが正しい？、「雪はどっちに流れる？」と決まりと質問を続けた。その都度生徒の反応が早く、的確に答えに講師自身が驚いた様子だった。

輪中会議や出前授業の様子もホームページに随時アップしておりますので、ぜひご覧ください。

引き続きこのホームページを、今後の NPO 活動に役立てていただければと思います。

「天サイ!まなぶくん」の連続受賞と新機能について 古川 修

NPO会員の古川修です。「天サイ!まなぶくん葛飾版」のアプリをリリースして3年半。ここ葛飾から発信された「防災情報を可視化するアプリ」が改めて賞をいただきました。

国交省主催の防災アプリコンテストで優秀賞に当たる「防災アプリ賞」を2年連続受賞！

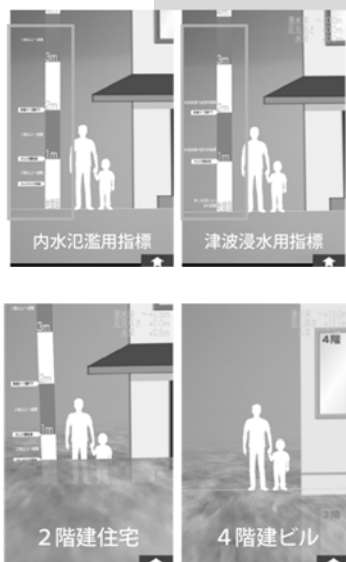


2015/10/5、国土交通省主催の防災アプリコンテストにて、天サイ!まなぶくんの元となっている、防災アプリ「AR ハザードスコープ」が、「防災アプリ賞：リスクコミュニケーション部門」を受賞いたしました。防災情報を体感することで事前学習的に防災意識の向上を支援するアプリとして表彰されました。■受賞内容→各種防災地理情報を地図表現するだけでなく、カメラを通した実写へハザード情報をAR（拡張現実）表現することができるアプリとして、操作性やレスポンス等の完成

度に優れる上、利用する防災地理空間情報の種類が多い点が受賞の要因です。

このたび受賞した「ARハザードスコープ鎌倉市版」に搭載されている新機能についてお伝えします。※葛飾区版にはまだ未搭載の機能ですが搭載可能ですので検討しましょう

ARハザードスコープ鎌倉市版に搭載の新機能についての紹介



浸水深さによって
指標が変わります



オフラインのときに地図を
保存した地図を表示できる機能



防災クイズなどの
学習コンテンツを
搭載できます。

「天サイ!まなぶくん葛飾版」が他の市区町村に負けないよう、追加掲載したい機能や追加防災情報のリクエストなどお待ちしております。

知る 《情報・経験を共有する》

考える 《対策を検討する》

2006

2007

2008

2009

2010

2011

2012

2013

2014

2015

2016

ワークショップ

- 第1回
- 第2回
- 第3回
- 第4回
- 第5回



街歩きで川の水面の方が市街地よりも高いことを実感



・地理情報システム (GIS) で地域の水害リスクを共有



行政による過去の状況の理解



洪水ハザードマップの理解



大規模水害発生時の対策の検討



将来のあるべき市街地像の検討

第1~5回 ワークショップ

地域の水害リスクや行政の防災体制の現状を勉強した。それらを踏まえ、水害発生時に備えた自助・共助のあり方、被災生活のイメージ、水害に強い市街地の目標像を議論・検討してきた。

- 第6回
- 第7回



町会の方が GIS を活用して、町会の人たちと水害リスク情報を共有

西新小岩周辺地域における安全・快適街づくり勉強会

町会、NPO、専門家、葛飾区、東京都、国からなる勉強会を立ち上げ、広域ゼロメートル市街地における水害対策の検討を行った。

①安全避難高台の確保、②浸水対応型建築物の整備、③近隣継続計画の策定、④輪中共同体会議の設立、の4つの課題が共有された。

- 第8回
- 第9回



地域の大人と中学生が地域の水害リスクを学習

新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会

安全・快適まちづくり輪中会議

- 第1回「持ち寄りの共助」
- 第2回「持ち寄りの共助」
- 第3回「わからないことをなくす」
- 第4回「iPad で地域を観察する」



被災地訪問



南三陸町を視察し、被災地と経験を共有した。

- 第5回「経験の共有」
- 第6回「これからの協働のあり方を考える」
- 第7回「高台化のあり方を考える」
- 第8回「経験を共有し、深め、輪を広げる」
- 第9回「地域の新たな状況を共有し、未来(ヴィジョン)を考える」

協働体制をつくる

研究する

俯瞰する

専門家・大学

ワークショップ開始時

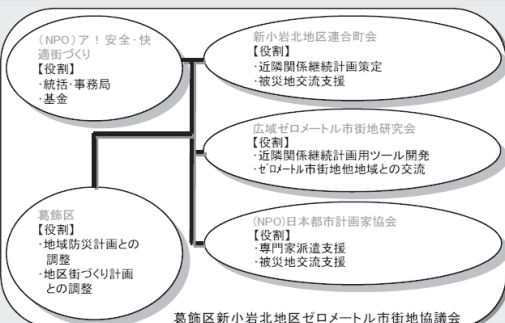


- ・ワークショップの支援
- ・水害リスクに関するデータの作成

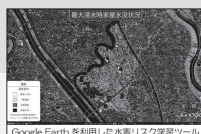
シンポジウム
「大規模水害に地域で備える」
全国まちづくり会議 in 恵庭

全国まちづくり会議 in 川崎
パネル展示

新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会



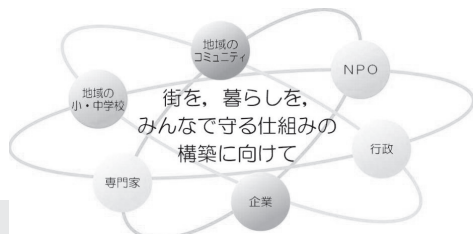
- ・水害リスク学習ツールの開発



国際交流イベント
水害に備える安全・快適まちづくり
シンポジウム
全国まちづくり会議 in 熊本

国際交流イベント
全国まちづくり防災フォーラム
全国まちづくり会議 in さいたま

現在の協働体制



浸水対応型市街地研究会

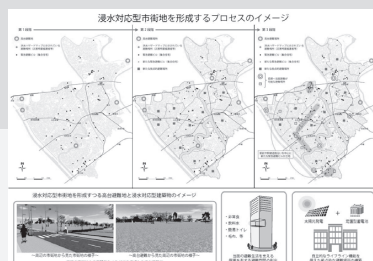
- ・広域避難の実行性の検討
- ・必要な避難空間の推計
- ・高台、浸水対応型建築物のあり方の検討

シンポジウム
「街を、暮らしを、みんなでどう守るか」
全国まちづくり会議 in 神戸

- ・防災アプリ
「天サイ！まなぶくん」の開発



シンポジウム
「大規模災害に備えて街を、暮らしを、みんなでどう守るか」
全国まちづくり会議 in 長岡



シンポジウム
「これからの協働のあり方を考える」
全国まちづくり会議 in 北上

実施する

NPO

町会

行政

ワークショップの主催

ボート乗船下船・親水体験イベント
「葛西海浜公園へ行こう」



船から街を見る



町会独自の取り組み



洪水ハザードマップの配布（区）



区民や事業者等への
水害出前講座の開始（区）

まるごとまちごと
ハザードマップ（国）

大規模水害対策検討委員会設置（区）

中川テラス開園（区）

松戸市・21世紀の森と広場への避難訓練
西新小岩3丁目公園での炊出し訓練



避難用ボート使用訓練



小中学校での
出前講座

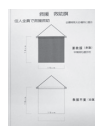


都市計画マスタープランの改訂（区）
＜高台避難場所の位置づけ＞

「事業継続計画作成のすすめ」
を作成（国）



赤旗・白旗 救援訓練



「水害時における民間集合住宅との
一時避難協定の締結に係わる
ガイドライン」作成（区）

防災アプリ「天サイ！まなぶくん」



高台整備事例：東京理科大学キャンパス
1.5m 程度の盛土を実施

洪水緊急避難建物の指定（区）

避難確保計画ひな型作成（区）

防災啓発 DVD の作成（水害編）（区）

タイムラインの検討（国）



民間マンションとの
水害時一時協定締結
中学生と協働で防災訓練
スタンドパイプの練習会

洪水緊急避難建物への備蓄物資配備（区）

水害に強い建物を促進する
街づくりルールを検討中（区）

消防団へのゴムボートの貸与（区）

実施する

小中学校	PTA	福祉施設 民生児童委員	地域の有志
水害も考慮した 避難所運営会議	上平井中学校理科部 の取り組み (NPO や大学も支援)		
			
水害を想定した 避難訓練の実施			
			
			
	ふたがみこどもまつり でのボート体験		
			
	たつみ保育園 松上小への避難訓練	東京都認可保育園 BCP 作成の義務化	西新小岩三丁目の 有志による勉強会
		アレルギーガイドライン 非常食のアレルゲン除去食の購入	俺たちの朝旅
		高齢者向けの 防災講演会	
		水防法改正の説明会	
			ゴムボートの 操縦訓練

【表表紙】

- 1 段目：中川奥戸展望デッキから中川を望む
- 2 段目：[左] 左中川をはしる船
[中] 中川テラスの釣り人たち
[左] 中川テラスの花壇とベンチ
- 3 段目：[左] 中川奥戸展望デッキで中川を眺めながらたたずむ人たち
[中左] 東立石緑地公園の前の中川テラスから見たスカイツリー
[中右] 中川奥戸展望デッキの下ベンチ
[右] 中川奥戸展望デッキへの入口

【表表紙のウラ】

- 1 段目：[左] 献花
[中] 2010 年 7 月中川テラス開園セレモニーで挨拶をする鈴木一喜 町会長
[右] 2011 年 3 月第 9 回ワークショップで参加者らを前に開会の挨拶をする鈴木一喜 町会長
- 2 段目：[左] 2007 年 11 月ボート乗船下船・親水体験イベント「葛西海浜行へ行こう」での徳倉眞治 会長
[中] 2010 年 7 月「西新小岩周辺地域における安全・快適街づくり勉強会」で鈴木一喜 町会長、徳倉眞治 会長、石川金治 理事長らが机を囲む
[右] 2007 年 11 月「葛西海浜行へ行こう」で挨拶をする徳倉眞治 会長の背中
- 3 段目：[左] 2007 年 11 月「葛西海浜行へ行こう」でウェットスーツ姿を着てボートを引っ張る石川金治 理事長
[中] 2008 年 5 月シンポジウム「大規模水害に地域で備える」で意見を述べる石川金治 理事長
[右] 2013 年 3 月「大規模災害に備えて街を、暮らしを、みんなでどう守るか」で開会あいさつをする石川金治 理事長
- 4 段目：[左] 中川から見えるスカイツリー※
[右] 夕日に染まるスカイツリー※

【裏表紙のウラ】

- 1 段目：[左] 西井堀の由来についての地図
[中] 1909 年の新小岩北地区・奥戸地区周辺の市街化状況
[右] 1958 年の 1909 年の新小岩北地区・奥戸地区周辺の市街化状況
- 2 段目：[左] 新小岩北地区・奥戸地区の未来構想（2008 年 東大チーム作成）
[右上] 中川テラス
[右下] かつしかハープ橋と防災訓練の様子

3 段目：中川堤防上から撮った風景

4 段目：[左] 2012 年 9 月第 1 回輪中会議の様子

[右] 2016 年 3 月第 9 回輪中会議の様子

【裏表紙】

1 段目：中川テラスから中川を望む。対岸は東立石緑地公園

2 段目：[左] セーヌ川（フランス・パリ）に架かる橋と川沿いの遊歩道

[右] アムステルダム（オランダ）の住宅街の運河にかかる人道橋

3 段目：[左] セーヌ川にある船着き場と遊覧船

[右] 隅田川にかかる勝鬨橋

4 段目：[左] 隅田川にかかる蔵前橋

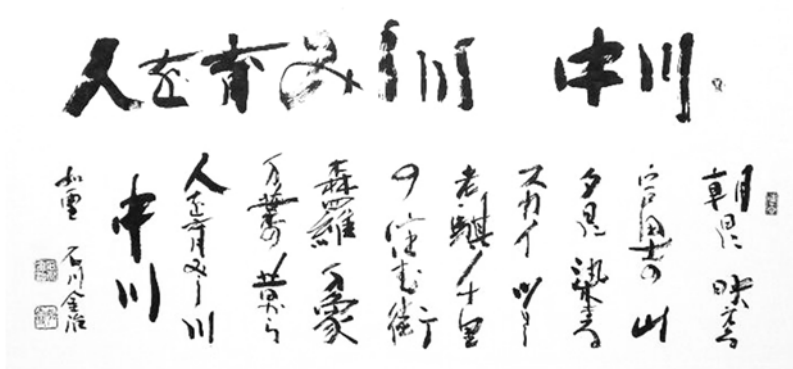
[中] 中川テラス

[右] セーヌ川沿いの遊歩道に設置されたクジラのオブジェ

5 段目：中川堤防上から石川金治理事長と渡邊喜代美さんと見た夕焼け。高速道路の向こうに東京スカイツリーが見える。この夕焼けを見た石川理事長が表紙の書を作詞した。

※印の写真は、地域人提供。その他の写真は、NPO ア！渡邊、古川、塩崎が撮影。

記：塩崎由人（NPO ア！安全・快適街づくり）



石川作詞「人を育みし川、中川」の詩文全体は、北新小岩地域を流れる、中川のありがたさを、いつも感じているので、その讃辞です。この“老馬千里”の文言は、私達と一緒に活動の屋台骨を支えている人の顔を想像しやすい文言を探した結果です。また作詞のもう一つの動機は、事務局会議終了後、渡邊さんと塩崎さんと3人で、夕日の中のスカイツリーを見た時の感動が大きかったから、その感動が原動力となって、作詞をしました(石川) 老馬、老驥はと問うたら、馬小屋に寝ていても志は千里にあり、老馬、老驥もと個性あふれる表現という。表紙の写真は塩崎さんによる中川賛歌。再度表紙に登場いただいた書は生きている(渡邊)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ♪ 編集後記 ♪ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

NPO ア！安全・快適街づくりは、創設2002(平成14)年から2016年で14年。そして15年を迎える。鈴木町会長、徳倉会長、石川理事長の3巨頭をみおくった。3人は千の風について街を人を見守っているだろう。3人は天で議論をしているだろう。それぞれ問題提起をして逝った。寂しさよりも緊張がある。

「葛飾区新小岩北地区ゼロメートル市街地協議会」により「輪中会議」も持続し多様な活動があった。第9回輪中会議は、100人近い多分野の参加があつて「総合化」が一步前へ。そして、未来を考える。親水都市、ネットワーク都市、世代連携の都市など新しい視点に進展していった。地域の小中学校との連携は、中学生や元中学生、校長先生の輪中会議参加で未来を感じた。日常のかかわりが大事。だが、非常時に彼らの力は地域の期待である。上平井中地域防災研究部は、自分たちで夏休みのプログラムを考えるようになった。街歩きには町会長の協力がある。小中学生と大学生のコラボレーションも楽しく、未来の大人が育つことがとてもうれしい。地元の中学生は町会の非常時協働要請にも応えてくれたと町会長の報告。すばらしい！。毎月根気よい地元勉強会は大学生も参加し刺激をうける。区へ提言。輪中会議で発表する。そのエネルギーはいい循環となって、輪中会議はさらに刺激を受ける。

2011・3・11東日本大災害から5年目を迎え、東日本の人たちのご苦労はいまだ続いている。地元のみなさんは“自分たちの街は自分たちで再生させたい”この思いでがんばっている。九州・熊本地震は活断層の恐怖を知った。地域社会の対応はどうするか、ボランティア対応として何があるか、それぞれの限界を理解した上で、皆がシェアし合えるシステムをどう創るか、全ての皆に問われている。

安心・快適まちづくりは、地域の将来、人口動態や文化、歴史、人々の暮らし継続まで読み解いていかなければならない。「防災“も”まちづくり」。持続可能なまちづくりは“まずもって語らい”未来の大人たちに託すべきは何か、深慮し、「多様性」を旨とし世間を超えた連携の時期にあるようです。これからも地域とともに、持続可能社会を希求していきたい。今号も皆様の積極的な参加で、すばらしい総集編となりました。ありがとう♪

2016・6 編集責任 渡邊喜代美 編集協力 塩崎由人

「特定非営利法人 ア！安全・快適街づくり」

〒124-8535 東京都葛飾区西新小岩三丁目5番1号

電話 / FAX 03-3696-7480

ホームページ: <http://www.banktown.org/>

